
路地裏のお月様

透風真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

路地裏のお月様

【Nコード】

N3154T

【作者名】

透風真白

【あらすじ】

山田 花は悪態を吐きつつも他人を放っておけないお人好し。そんな彼女は巻き込まれ体質な女子大生。ある日訪れたお店の店主に、なぜか妙に懐かれてしまった花は…？ 基本的にコメディー。時折シリアス。けれども結局明るいお話目指して頑張ります。

第一話「裏道の小道にて」

最近では、珍しい名前を付ける親が多い。一見してわかる名前のが、逆に珍しいと言えてしまうのかもしれない。それも時代なのかもしれないが、カタカナに無理矢理漢字をあてはめるのは、どうしても暴走族を連想してしまい、いつも彼女はむつり、と静かに眉を顰める。

「なんていうか、惜しいよね」

そんな彼女の名前をみつめては、苦笑する者、笑いを堪える者、固まる者、憐憫の情をもよおす者、と様々であるが、この台詞を一度は皆、口にする。

「まあね」

やまだはな
山田花は今日もため息混じりにそう答えるのだった。

「山田ー」

名前を呼ばれて顔を上げた花は、向かいに腰をかけた男をちらとみつめ、それから視線をまた定位置に戻した。

昼時の学食というのはどこかしこも騒々しいもので、ひとりで食事をする一部の学生をのぞいては、その場に居るほとんどの者が楽しそうに笑い声をあげている。彼女も、つい数秒まではその例外に該当するひとりであった。

ずるずると豪快に麺をすする音が響いて、同じテーブルに着いた目の前の男はそれにあからさまに嫌そうな顔をしている。

「女子が普通、そんな豪快にカレーうどんをすするか？ いや、男子でもそこまでやらねえよ」

はねるのを気にしてちまちま食べるなんぞ、なんと女々しい。花は、控えめの茶に染めたショートボブにも、着ている白地に紺の水玉模様のシャツにもカレーがはねるのをまるで気にする様子もなく、心の中で許可なく向かいに座っている男を罵りながらも無言でうどんを咀嚼していた。

水をぐい、とこれまた豪快に飲めば、しかしテーブルにコップを置く仕草は繊細なものであり、彼女の所作がいかに美しいかを物語っていた。

もつとも、目の前の男はそれに気が付くほど男として立派ではなく、なんの感慨もなしにそれをみつめては、呆れの息を吐き出しつつ頬杖をつく。

「なあ、みどりちゃんさあ、彼氏いないって言ってたじゃん」

うどんを食べ終え、あとは席を立つだけになった彼女に、物憂げな様子で男は語りかけてくる。面倒事かと顔を顰めながらも、この場をあとにできないのはお人好し気質の性なのか。しかして花は、それを自覚してはいなかった。

「佐藤、その話長いの？ 私、次あるんだけど」

腕時計をちらりとながめて、花は目の前の男、佐藤に声をかける。佐藤は、俺今日午前で終わりだもん、と悪びれることなくそう言葉にした。

花は一瞬なにかが爆発しそうになったものの、それを胸中でなんとか処理し切れれば、ため息を吐いてわかった、と口を開いた。

「私も次で終わりだからそのあとだったら話聞くけど」

口を尖らせて少しふて気味だった佐藤は、花の言葉を聞くと先程までが嘘のようにば、とその顔を綻ばせた。

「え、マジで？じゃあ終わったらメールいれてよ」

「へえへえ」

トレイを持って片付けを済ますと、花は次の教室へと向かう。その間にも何人かに男女かわりなく声をかけられる彼女であったが、それらを適当にかわしては目的地へ一直線に歩いた。

山田花に対する他人の評価は、わかりやすいようでわかりにくい。ある者は彼女をクールと言い、ある者は彼女を面倒見が良いと言う。しかし総じて皆が言うのは「結局見捨てられない」という言葉で、彼女は面倒がりながらも、冷たい言葉を放ちながらも、自身に困って縋りついて来る人間をにべもなく見捨てることはできないのだ。だからこそ今日も彼女は、たくさんの迷える子羊達に愛の手をさしのべる。内心で心底面倒だとばやきつつ。

おせっかいと言われるほど自ら首を突っ込まない。しかし来る者は拒まず受け入れてしまう。巻き込まれ体質な悪態を吐くお人好し。山田花嬢は、そんな不思議な勉強に励む21歳であった。

「うつ……胃がむかむかする」

授業が終わり、佐藤と合流した花は、最初は近場の喫茶店にて話を聞いていたものの、そこから何故か人数が増え、あれよあれよという間に場は居酒屋へ、そして二次会のカラオケへ、といった具合に気が付けば一夜が明けていた。

電車組は始発が動き出したので帰る、と思いいに散っていったが、何人かに足止めをくらった花はまたも24時間営業のファミレスでモーニングコーヒを飲みながら相談とも愚痴ともつかない話に付き合うはめになり、終わったのは今、午前9時を回った頃であった。

大学の近くであつたのは徒歩組の彼女としてはありがたかつたが、それにしたってひとり暮らしの花の家は徒歩20分と近くも遠くもない微妙な距離だ。徹夜で人様の相談事を腹に収めた花としては、この距離は些かしんどいものがある。

花は夜はあまり通らない、飲み屋街が立ち並ぶ裏通りを歩こうと目の前の道を右折した。ほんの5分程ではあるが、一応は住んでいるアパートまでの近道になる。

ぼんやりとした頭でふらふらと裏通りを歩けば、閑散とした様子の裏道がある。夜とはまた違った風情のそれらを眺めては、花はふと裏道の更に奥まった道に目があった。

あんな通りはあつたろうか、と首を傾げながら、左に位置するその小道をちらと視界に入れてみれば、そこには古めかしい看板があった。

立て看板には「月見堂」と書いてあり、花は一瞬、和菓子屋かなにかだろうか、と考える。

小道の先は行き止まりで、そこに入れば単なる寄り道になってしまい、真っ先に帰りたいと思っていた花の心はしかし好奇心が勝り始めていた。

寝ていない思考回路はどこがおかしくなってしまったのか、いつもならば面倒だ、と一蹴する事も興味をひかれてしまう。

それならば、と花は心に素直に従えば、小道へと歩を進めた。

「月見堂」と書かれたその店の構えは、まさしく古めかしい、と評価した看板そのものであった。

昔ながらの平屋に、月見堂、と書かれた看板を載せ、開け放たれた店には所狭しとあらゆる雑貨物が置かれている。それはアンティ

「ク調の可愛らしいものから、奇妙奇天烈な面まで、一体この店主の趣味はどうなっているのだ、と疑いたくなる。」

店の敷地からはみだして置かれた棚には、本がぎゅうぎゅうに詰められており、売り物であろうが分類が滅茶苦茶で、ここから気に入りの本を手にするのはなかなか骨が折れそうな作業であった。

花はぽかん、とそれらを眺めていたが、やがてひとつの指輪に目がいった。

店の少し奥側にあったそれは、小さめのガラスケースにあるひとつだった。ケースは少し埃をかぶっていて、花は取り出したハンカチで少しそれを払うと、クリアになったケース越しに再度指輪をまじまじとながめた。とても可愛い、はめこまれた黄色の石は鈍く光り、それが月を思わせるやはりアンティークらしいつくりのものだ。

「……これ、本物なのかな」

一応はガラスケースにおさまっているが、見ると鍵がかかっているわけでもなんでもない。あくまでも埃避けに一応かぶせてあるんですよ、といった具合で、値が張るようなものには見えなかった。

そうではなくとも、花は特に宝石に詳しいわけでもなければ、装飾品を付ける事に格別に執着しているわけでもなく、ともすれば年頃の年代の女性達よりはるかに目利きは悪いほうであった。

そんな花が何故この指輪に惹かれるのかは、彼女自身もわからなかった。ただどうにも、この指輪を放ったままここを離れ難い。そんな感情が彼女の胸中を支配していた。

「その指輪、気になりますか？」

唐突に耳元で響いた声音に、花はぎゃあ、と色気のない悲鳴をあげては身体をびよん、と横に跳ばした。脳内ではゆうに3mは越え

たのではないか、と思ったほどであつたが、もちろんそんなことはない。いまだ声の主は、花の傍近くに微笑んで立っていたのだから、驚きに跳ねた心臓を落ち着かせながら改めて声の主を確認すると、それは男性だつた。

微笑んだ佇まいはなんだか酷く儂げで、しかし体の線が細いとか、そういったことではない。特別筋骨たくましい、というわけではないが、かといって細くもない、一般的な男性のそれとなんら変わりはない。

ただ、その表情だ。

厭世的と言つか、浮世離れしているというか。とにかく花や、今の日本を生きている人間とはどこか違った時間軸に身を置いていそうな、そんな雰囲気があるのだ。

花は少し警戒しつつもその顔を観察する。艶やかな黒髪はだらしなく前髪が伸びており、なかなか顔を確認し辛い、のぞく瞳は随分と色男だとうかがい知れた。ぽつり、と目元に付けられたほくろはまた怪しい色香を放っており、女性が放っておかなそうな雰囲気をすぐに感じ取れる。

なんにせよ、第一印象ではあるが、花はこの男性にどうも好感を持てそうになかった。どこをどう、と訊かれれば難しいのだが、とにかく本能的な何かが花に近付くな、と告げるのだ。

しかしそんな花の思いとは裏腹に、男は首を傾げて花に再度声をかける。

「あの、この指輪、いりませんか？」

男の声に我に返れば、花はへつ、と間拔けな声をあげる。そうして男が指し示すガラスケースへと視線をやった。

「あ、ああ。はい、気になったんですけど……今、手持ちがあんまりないもんで」

財布の中身が5千円ばかりなのを思い出し、花はぱりぱりと頬をかく。結局、諦める他ないだろう、と結論を出せば、またきまず、と言いついて、花はその場を去ろうとした。

しかしその前に、男が花の腕を掴み、歩みを阻止した。

「ずっとみつめていらしたでしょう？」

「え、うわ」

「ああ、ほら、ぴったりだ」

素早い動作で掴まれた花の左手に、男はするり、と指輪をはめる。花はぎよっとして、はめられた手を凝視した。

左手の、しかも薬指。鎮座ましますそれをながめては、花は小刻みに震えた。

異性に左手の薬指に指輪をはめられるのは、人生初である。花はそれを認識すれば、震えだけでは飽き足らず、みるみる頬を赤らめていった。

「あああの、お、おいくらですか」

なんとか震える声で言葉を発すると、それをどう思ったのかくつくつと面白そうに笑いながら、男は首を振る。

「お代はけっこうです。そういうものは、愛してくれるひとのもとへゆくのが一番良い」

「いえ、でも」

「どうせ安物ですから。ただ」

言葉を切って、微笑む男の妖艶さに、花は初めて彼の人間臭い部分を見た。

それに驚いて固まっている間に、男は花の耳元まで唇を寄せると、そつと囁く。

「また来てね」

言つて、食まれた左の耳はおかしいくらいに熱かった。

花は全身を真つ赤にさせると、悪態を吐くことも忘れて、あらん限りの力で持つて叫び声をあげると、一目散に逃げていった。

静けさを取り戻した小道を、男は一瞥すると、くす、と吐息だけで微笑む。

「……可愛い」

涙目で震えた初心な女の子を思い出しながら、男は呟く。誰に聞かれることも咎められることもなく、男は店に用意されたパイプ椅子へ腰をおろすと、どこから取り出したのか手にしていた本を読み始めた。

『なにあの男、なにあの男、なにあの男！』

顔を真つ赤に染め上げ、だるいと感じていたのが嘘のように、ものの１０分で家までの距離を走り抜いた花は、息を切らしながら玄関でへたりこんでいた。

いまだ余韻覚めやらぬ耳をおさえながら、苦しげにうめいては先程の男を反芻する。

「つて、やめ！思い出すな！」

シャワーでも浴びよう、そうしよう！誰に言うでもなく自身に言

い聞かせるように声を上げれば、花は靴を脱いで筆笥の引き出しを勢い良く開けた。そこでふと、忘れていた事実を目にする。

「あああ！」

声を上げて、左手を目線まで持つてくる。

指輪は、返すつもりであったのだ。タダより高いものはない、とは実家にいる母親の弁である。花も、まったくもってその通りだといつもうなずいていた。

そうなれば、花の答えは決まっている。

「返しにいくしか……ねえのか」

がつくり、と肩を落としてその場にうちひしがれる。

できれば二度とお目にかかりたくはなかったが、こうなってしまうっては仕方がない。

花はため息を吐いて指輪を抜くと、小さな鏡台の前にそれを繊細な動作で置いた。

「まさか、ね」

それを見越してあのような事をしたのではないか、と花は男の考えを読み解こうとしたが、さすがにそれはなからう、と結論を下す。そもそも初対面でなにをどう思われるわけもないのだし、花がもう二度と来ないようにしようと思ったのも、向こうにだって悟られてはいなかったはずだ。

花は着替えとバスタオルを手によれば、昨日から先程までにかけての疲れをすべて洗い流してしまおう、とため息を吐きつつも立ち上がった。

第一話「裏道の小道にて」(後書き)

新連載始まりました。よろしくお願い致します！

第二話「謎な店主の真意はいかに」

次の日にでも返しに行こうかと思っていた花であったが、一度指にはめると妙にしっくりくるその指輪をみて、どうしても返すのは口惜しいと考え始めていた。

しかし、である。

やはり無料で進呈される義理もないと感じれば、花はため息を吐く。結局、これがどれほどの価値なのかもわからない。

「うーん、古いっばいけど…一万とかするのかな」

呟いてまじまじとみつめた指輪は、しかし自身の値打ちを答えてくれることはない。

なんとかあの店主に会わずしてこれを返す手段はないものかと考えたが、あんなに近場であるのに郵送するのは馬鹿馬鹿しいし、住所もわからない。第一、破損してしまつては元も子もない。

あれやこれやと考えて、結局、花は手渡しで返すのがいちばん良いのだろうと最初に導いた結論に戻らざるをえなかった。

「で、なんでそうなるんだよ」

「うるさいな。金曜日に色々話聞いてやつたんだからそれくらいしてくれてもいいでしょ」

「場所がわかんねーって」

「……だから、すぐそこまでは一緒に行くから返すのだけ佐藤がやつてよ」

「なんでそんなに嫌なわけ？」

「私の本能がダメ、ゼツタイと告げたのでな」

月曜日の大学にて、同じ講義を終えた佐藤を捕まえた花は、月見堂にて起こったいきさつを話した。そうして頼んだのだ。指輪を店主に返してはくれないか、と。

花は元来礼儀正しい人間で、正直これはかなり不本意だ。しかし、元々から近付きたくない雰囲気醸していた男が、更に危険視せねばならない行動をした為に、もう半径3m以内には寄りたくない、とどう頑張ってもそう体が本能で告げてきてしまうのだ。

初対面の女性の耳を口に含むなど、非常識どころの話ではない。高校時代の恋人にさえされたことがなかった行為を許してしまった事実、思い出してもまたもや花は沸騰しかけた。

「……別に良いけど。一体なにをされたのかなあ？」

にやにやしながら指輪を入れた小さな巾着袋をみつめる佐藤を、花は睨みつける。

「うるさい。詮索無用」

「巻き込まれるんだからそんくらい教えろよ」

なおもにやつく佐藤をさらに睨みつければ、花は伝家の宝刀を出す。

「もう二度とあんたの相談には」

「申し訳ございませんでした」

「よろしい」

午前授業で一日を終えたふたりは、揃って月見堂へと足を運ぶこととなった。

大学を出て、駅前のにぎやかな表通りを歩く途中で、裏道へと入っていく。やはり午前中は表通りと違って閑散としており、どの店

も扉にはクローズの文字がぶらさがっていた。

スナックやら赤提灯の店やらが立ち並ぶ中、見えてきた左側の小道に、花はたたり、と汗を一筋流した。

「佐藤」

「ああ、ここか。……うーわあ、本当わかり辛いな」

「でしょ。今まで気付かなかったんだよねえ」

「で、あそこの店でこれを返してくればいいのね」

花は無言でうなずく。佐藤はそれをみて同じように首肯すれば、いつてくる、と巾着袋を握り締めて小道の奥へと進んでいった。

ここに立っていると少しのぞけば花が居る事がわかってしまう。

花は少し裏通りを歩いて、表通りの入り口付近で歩を止めた。ここにいればとりあえず捕まることはないだろう、と息を吐く。

車がひっきりなしに通り過ぎ、たくさんの店が立ち並ぶ表通り。駅付近にあるデパートも割りと規模が大きいものだ。大学もあることから、この近辺は高級な店と学生が通えるような安い食堂のような店や、ファミレス、カラオケ、ゲームセンターなども入り乱れている。地元の高校生であろう集団を目で確認した花は、はて、何故平日の午後にさしかかるうかという時間に彼らは居るのだろう、と疑問符を浮かべていた。

しかして、花は、首を傾げた。

腕時計を見ると、もう既に10分程時間が経過していた。ただ指輪を返すだけで、こんなにも時間がかかるものだろうか。

花は何事かが起こったのだろうか、ちらと裏通りに目線をやる。踏み出そうかどうか迷っていると、ポケットにいれていた携帯電話が震えた。

着信に慌てて出れば、佐藤が弱りきった声でこちらに来てくれ、と声をあげているではないか。花は役立たずめ、と冗談とも本気ともとれない口調で毒吐けば、電話口で佐藤の唸り声が響いてきた。

花は結局それを了承し、重い足取りで今来た道に戻って行った。

「……まさか指輪を返却しに彼氏を寄越すとは思っていませんでしたよ」

につこりと微笑んだ月見堂の店主に、花は思わずはあ？と間拔けな声をあげる。困った顔をする佐藤を見て、恐らくそういう話をしたのだろうな、と合点がいった。

「まあ、その、そういうわけなんで、他の男性からの贈り物は受け取れないんです」

花もそれならば、と話を合わせて店主をみつめた。佐藤が持っていた指輪を受け取ると、花はすみません、と添えて店主にそれを突き出した。

店主はいいえ、と首を振れば、人好きするような微笑を再度浮かべた。花はそれに不穏な何かを感じ取れば、口元を僅か引き攣らせる。

しかしそんな花に何を思ったのか、表情を変えことなく佐藤へと目を向ければ、店主はそのまま彼へと声をかけた。

「先程は失礼しました。でもやはりご本人様以外からは受け取りたくなかったものですから」

「え？ああ、いいえ。俺も、失礼だったかな、と思いますから」

慌てて首を振る佐藤を見て、どうやら揉めたというよりは笑顔で拒否をされ続けたのだろうな、と花は予想していた。

理性的にやんわりと言われてしまえば、佐藤もそれ以上はなかなか対応し辛くなる。先程の心底困ったような声も、そういうことならば、と納得できた。

「ですが、彼女は随分とこれを気に入った様子でしたよ。これを期にいかがですか？指輪をプレゼントして差し上げるというのは」

店主の言葉に、花も佐藤もぎよつとする。

確かに、ふたりが恋人同士であるならば、ええ、いいですよー、と照れ混じりに花が言い、そうだね、そんなに気に入ってるなら、と佐藤が答えれば済む話かもしれない。

しかし、ふたりはあくまでも友人だ。それ以上も以下もない。佐藤には愛しい想い人もいる。変な噂が立つのもお互いに御免被りだった。

「い、いえいえいえいえ！彼も私も一人暮らしの学生でお金ないんです！そんな高価なもの買えません！」

「でしたらお安くしますが？」

「いやいやいや、それこそ悪いですよ！返しに來た意味がないですよー！」

全力で否定する花に、微笑む店主。なかなか受け取らない男にしびれをきらした花は、とにかくそこらへんに放つてでも逃げてしまおうと考える。

ちら、と視線をすぐ傍の棚へうつしたところで、店主の瞳がきらり、と光った。

「女の子はね、男からプレゼントを貰ったらにっこり笑ってありがとう、と受け取るべきなんだよ」

言って、店主は花を抱き寄せる。横で見ていた佐藤は急展開にぽかん、と口を開けて突っ立っていた。

花はなんとか暴れてその腕を逃れようとするが、いかんせん力が

強い。

どう抵抗しても自力での脱出は不可能であろうと思われた。

「……自分の彼女が見ず知らずの男に抱きつかれてるのに怒らないの？」

小首を傾げて問うたその視線の先には、間抜けな状態で意識を飛ばしていた佐藤がいる。我に返った彼は、しかしどうしたものかと狼狽した。

正直、気の毒ではあるので助けたいのはやまやまだが、友人としてどこまでしていいのかわからない。確かに今は恋人ではあるが、それはあくまでこの場限りの設定だ。

たとえば花が愛しのみどりちゃんだとするならば、自分はどうかって男の手から彼女を救い出すだろうか。しかしいかんせん、そこまでの妄想癖もないのだから、そうそう気持ちをもっていけない。馬鹿馬鹿しいことを思い悩んで固まる佐藤に、花はついに顔を真っ赤にして怒鳴った。

「ちょっと佐藤！あんたあれこれ考えてないでとりあえず引つpegしなさいよ！助けないで放置ってどういうことだこのへたれ野郎！そんなんだからいまだにフリーなんだよ、みどりちゃん！！」

花の言葉に、今度は佐藤も顔を赤くする。

「うるせえな！！この男くらい押しが強きやなびくのかよ！」
「はあ！？馬鹿じゃないの！！？これはね、単なる痴漢行為！つか離せよいいかげん！顔良きやなにされても許されると思ってんじゃないわよ！」

花の言葉に満足気に微笑んだ店主は、その言葉を受けてかやつと

彼女を解放した。

ぜえはあ、と肩で息をする彼女をさすがに不憫だと感じたのか、大丈夫か？と佐藤が背中をさする。

「も、あんたねえ……だからそう、深く考えるのをやめなさいって！いいじゃない、もし振られたとしたってみどりちゃんの中であんたは自分を好きな異性ってカテゴライズされんのよ？女の子ってえのはね、生理的に無理でもなく、自分の好みからあまりの範疇外でもなければ好意を寄せられて断り続ける子なんてそうそういないもんよ。まずは言う。それで程よく押す！」

「だからそれが出来たらとづくにやってるって」

「そんなだから良い人止まりなんだよ」

「うるせえ！気にしてることを言うなあ！」

背中をさすっている手を止め怒鳴る佐藤に、へたれめ、と半眼で言う花は、すっかりここがどこであるかを忘れていて、かけられた声によってそれを思い出した。

「やっぱり、恋人じゃないんだ」

「え」

微笑んだ店主は、花に鋭い双眸を見せながら、佐藤へと視線をやった。

「ねえ、サトウクン。彼女のお名前は？」

「え、山田花ですけど」

「このお馬鹿！何故答える！」

「あ」

間拔けな短い声をあげる佐藤に、花は呆れて何も言えない。

完全に人選ミスだった、と手で顔を覆ったとき、花は気が付いた。左手になくなったものがまたしても収められているという事に。

「はな、って華麗のほう？それとも花屋のはなかな」

「ああ、花屋のほうですよ」

「だから答えるなっつーの」

べし、と佐藤の額をはたけば、またも佐藤が間抜けな声をあげる。その様子におかしそうに笑った店主は、やっぱりそうだよね、とうなずいた。

「そっちのが可愛い。花ちゃん」

「呼ぶな、減る」

「つれないなあ、良いね。ゾクゾクする」

その言葉に、花は全身を慄かせる。正直、彼女のがよほどぞくぞくしている。舌を出してぺろ、と唇を舐めるそのさまは、獲物を狙う肉食獣そのものだ。

「サトウクンにこんな役目を頼むって事は、花ちゃん恋人もいないんでしょ？ならやっぱりそれは返品しなくていいよ。俺から花ちゃんにプレゼント」

「……タダより高いものはないって母に何度も言われてきたんですけど」

「だから、ここにまた来てくれればそれでいいよ？」

やり取りにうんざりした花は、仕方なく観念することにした。

「わかりました。お支払いします。……おいくらですか？」

「それ？ええーと……20万はしなかったと思うんだけど」

「はああ!？」

首を傾げ、いくらだったつけ…と呟く男に、花も佐藤もすつきょうな声をあげた。

「に、にじゅうまんえん!？」

「貧乏学生にぽんと払える金額じゃねえよ!」

ぎゃいぎゃいと叫ぶふたりを他所に、店主はああ、と声をあげる。

「確か18万とかそこらだったかなあ。ね、たいした金額じゃないでしょ?」

微笑む店主に花は蒼褪め、なんとか指輪を返そうと声をあげる。

ふたりのやり取りをどうしたものか、と見ていた佐藤だったが、ふと手にしていた携帯電話に表示されている時刻を見て、あ、と呟いた。

「山田、もうバイトの時間じゃねえ?」

「え?げっ!やばい!」

時刻は11時50分。今日は早上がりさせてほしいという人の為に花は12時から働くことになっていたのだった、と思い至り、慌ててその場を走った。

残された男ふたりは、去りゆく彼女をただぼかん、とながめ、その後渴いた笑いを起こしたふたりの間に微妙な空気が流れたことを、花は知る由もない。

バイトが終了し、佐藤から謝罪のメールを貰った時には、花には一体なにを指してのものなのかはわからなかった。正直、今日やらかした佐藤のミスは多すぎる、と花には思えたからだ。

ため息を吐いて短く返信し、花はアパートへ帰路に着いた。

「ただーいま、っと」

誰もいない部屋の中に向かってそう声をあげてしまうのは、彼女の癖だ。実家の皆は元氣だろうか、と思いつながら、花は靴を脱ぐ。

正月には帰ったが、三年生になってからはまだあちらに帰省していない。そこまで遠い場所にあるわけではないのだが、かといって近いわけでもない。

新幹線を使ったり、飛行機を使ったり、そういうことをせずとも帰れる距離はおそらくありがたくはあるのだが、それでもここから帰るとなるとそれなりの覚悟をせねばならず、実家は決して嫌いな場所ではないし、むしろ家族仲は良いくらいだったが、花はその中途半端な距離感に多少うんざりした。

季節はもうそろそろ夏になる。半年は帰省していないので、そろそろ親からも催促の電話がかかってくる頃だろう。

「うーん、夏休みいっぱいにはあつちにいようかなあ……あ、でもバイトあるしな」

休めてもせいぜい一週間程だ。花はどうしたものかな、と呟きながら床に寝そべった。

そうして左手と床が触れた瞬間に生じたこつん、という控えめな音に目を見開けば、花はしまった、とその体を慌てて起こす。

18万円の指輪。まさかそんな値の張るものだとは思ってもよらず、随分とぞんざいに扱ってしまった、と焦りを覚える。小物を入れる引き出しに巾着袋に入れたまま、花はそつと指輪をしまった。

あの店主は一体何がしたいのか。

疑問はどんどん深くなっていくものの、花はそれを訊きたくはないような気がした。

訊いてしまつたら、もつと面倒なことになるのではないのか、とこれまた本能が告げているからだ。

明日は午後からだという事実には、と息を吐き出して、花は再度床に寝転がった。

毛足の長いラグに包まれて、ふわふわとした気持ちになりながら、このまま寝てはいけない、とわかつていつつも誘惑に勝てそうもないと思えば、花はゆるゆると目を閉じていった。

一人で暮らすには随分と広い一軒家は、今はもうひととは住んでいないと言われても信じられそうなほどにものがなかった。

無機質な空間はいかにも寂しく、男の心情そのものなのかもしれない。

寢室の扉は開け放たれたままで、四人は寝転がれそうなベッドの上に居るのは妙齡の男女ふたりだ。

空間を広く取ったつくりのそれらを見て、彼女ならばどんな反応をするのだろう、と男は微笑む。その腕に抱いている女性はしかして思いを馳せている女の子とは全くの別人で、さすがに気が咎めた男はすぐさま目の前の女性へと意識を戻した。

情事の名残を見せベッドの上で横たわる彼女は簡単に言ってしまうえば綺麗で、けれども男の精神を揺るがす何かがあるわけではない。それでも、今日を共に過ごしてくれる目の前の彼女を、男はひどく愛おしいと思った。

上機嫌に声を弾ませて、男は女へと声をかける。

「この前ねえ、面白い子がお店に来たんだ」

「ふうん？何、もうしちゃったの？」

「俺は頼まれなければそんなことしないよ」

「あら、失礼ね」

「もちろん、君と一緒に眠るのは好きだよ」

言つて、ふふふ、と笑いながら、ベッドの中で横たわる女の懷に寄り添うように、男はぴったりと身体を寄せた。

女は、長い髪をかきあげると、男のさらさらの黒髪をゆっくりと撫でてやる。

「……可愛いひと」

くす、と笑んで、女が柔らかく言えば、男はそのままゆるやかな眠りへと導かれていった。

第三話「お人よしのその所以」

「いらっしゃいませー」

客の来店を知らせる電子音に反応して、花は貼り付けた営業スマイルと共に決まりの文句を口にする。少し荒れたおにぎり、お弁当などの陳列を直しながら、新しく納品された商品を検品しつつ品だししていった。

花はコンビニエンスストアで大体週4日ほどアルバイトをしている。時折5日になるので、勤務日数はそうきっちり決定しておらずまちまちだ。大学も後半に入れば空白の時間も多くなってくるので、なにかとシフトを組む時、花は重宝されていた。無茶すぎる事も言われないので、個人的には気に入っている職場だった。

「で、その指輪いまだに返してないんですか」

「いいから手を動かしなよ、高田^{たかだ}君」

アルバイト先の後輩にあたる高田は、花よりふたつ下の大学一年生だ。口癖のように会えばおごってくれ、と言うこの後輩は、なんともお調子者で周りのバイトからも好かれている。

花も、この後輩が実は人間としてしっかりしているのを知っていて、なかなかどうして好感を持っていた。だからか、指輪の事をつい愚痴のようにぼろつと口にしてしまったのが先刻のこと。

失言であつたかと考えながら、もくもくとおにぎりを陳列している。そんな花を見ながら高田は小さく笑い声をもらした。

「山田さん、気にしないでもらっちゃえばいいのに。真面目っすねえ」

「そついうわけにもいかないよ」

少し口を尖らせて言う花に、高田は再度ふ、と微笑んだ。

「そういう所がまあ好きなんだけど」

「ん、今なんか言った？」

「いいえ。でもその男の人は大丈夫なんですか？あんまり近付かない方がいいんじゃない？」

「え、うーん……まあねえ。そうしたいところではあるんだけど……」

「案外、その金額だって嘘かもしれませんよ？」

「そんな嘘ついてどうするのよ。第一、調べたもん」

花の突然の告白に目を丸くすると、高田は調べた？と、驚いたように同じ言葉を繰り返した。

花はうなずいてそれに応える。

「質屋にいったね。まあ、売ろうってなったらもつと値は下がるけど、大体そのくらいだろうって言われた。で、手を動かしなさいって」

「なんというか、しっかりしてるんだかしてないんだかわからないですね、先輩は」

呆れたような感心したような顔で言いながら、高田はお弁当の陳列を再開した。

花はその言葉の意味を考えながら目の前のツナマヨを睨みつける。よく他人から言われるのだが、花自身は割りとしっかりしているほうだと信じているのだ。

考え込んでいる花をちらり、とみつめて、高田はこっそりため息を吐いた。

「最後の最後で詰めが甘いんだよなあ」

「ん？またなんか言った？」

「いーええ」

苦笑しながら答える高田に首を傾げながらも、花は特にそれ以上何かを突っ込む事はしなかった。

月見堂の前で、花は右往左往していた。

たとえばポストのようなものがあつたならば、そこに指輪を放り込んでしまえばいい。そう思つて、普段は通らない時間帯、バイト帰りの午後１１時を回つた頃にこの場所を訪れていた。

店の規模的に、ここは住居兼ではないだろうと思ひ至り、その読みはおそらく当たっている。

物音すら全く響かない静寂に、花は安心半分不安半分で複雑な思いを抱いていた。

花は必死になつてあちらこちらに視線をさまよわせてはみたものの、郵便受けらしいものはついぞ見当たらない。

どうしたものだろうかと途方に暮れて、やがて諦めるしかないのだろうと悟ると、ため息を吐いてその場を去ろうと踵を返した。

どす、と何かにぶつかつた衝撃があり、花はよろけそうになる。鼻を擦りながらすみません、と小さく呻く。

「花ちゃん、大丈夫？」

「！？ 店長さん」

驚いて顔を上げれば、必死に会わないようにしていた男とばつちり遭遇してしまい、花は俄かに動揺してしまう。

面白そうにその様子をながめていた男は、やがて何かを思い出したかのようにああ、と呟いた。

「たちはむつき
橘佳月」

「たちばなよしづき？」

「橘は一般的な橘って字。佳月はかげつで佳月だよ」

「ああ、満月のことですね」

なるほど、とうなずいた花に、佳月は顔を綻ばせる。

「初めて会った日は、ちょうど満月だったね」

「え？そう、でしたっけ」

「そうだよ」

笑った顔にぽかん、と呆けていた花であったが、今はそんな話をしている場合ではないと思い至れば、ちょうどいいと右手に握り締めていた巾着袋を佳月に突き出した。

「橘さん、これお返しします」

「こんな所にこんな時間うろろろするのはよくないな。お家はすぐ近くなの？送っていくよ」

「綺麗に無視をしないでください。これをお返しすると」

「道案内をしてくれないのなら寄って行く？お茶を出すくらいならできるけれど」

にこにこ微笑みながら、花の言葉をことごとく流していく佳月に、どうしたものかと花は唸り声をあげる。しかしそんな反応すら楽しんでいる様子の佳月は、ますます笑みを深めていくばかりだ。

「ねえ、花ちゃん」

「なんですか？」

花の質問にはまるで答える様子はない。しかし彼は好き勝手、花に質問をしてくる。それにほとほとあきれ返りながら、花はみるみる体の力が抜けていくのを感じた。

元来の面倒臭がりが災いしたのか、もう「どうでもいい」という方向へと心情が傾き始めている。

「どうしてそんなに頑なの？俺にこれをプレゼントされたのが、そんなに困る事？」

佳月の質問に先程まであきれ返っていた花は、その言葉に目を丸くする。

「何を言ってるんですか？常識で考えたら当然でしょう！20万の指輪を初対面の女にぽんとやる男がどこにいますか！」

「18万だよ」

「四捨五入すれば20になります！そしてそんな事はどうでもよろしい！ちよつとそこに直りなさいっ！」

花の横でへらへらと笑っていた佳月は、憤怒の形相に変わっていき花を見て少しばかり表情をかえる。先程の花のように目を丸くして、珍しいものを見るかのように花をまじまじとみつめていた。

直れ、という言葉と同時に、花は、さあほらそこに立つ！と自身の真正面を指す花に、佳月は慌ててはい、と返事をすればぴんと背筋を伸ばして花の真正面へ立った。

こうして見ると、身長155cmと平均より些か小さい花よりも佳月はだいぶ大きい事がうかがえた。ひよつとしたら180はあるのかもしれない、と思えば、急に冷静になった花は脳内の片隅で萎縮という文字を浮かべたが、今更ここで怒りをおさめるのもおかしい。

花は気持ちをなんとか立て直せば、目の前の男を睨む。佳月は、

花の感情の変化を面白そうにみつめている。反省などまるでいないのは明らかだった。

彼のそんな表情を見ると、苛々が募っていくのはそう難しいことではない。花は忘れていた怒りを再燃し、夜中であるというのも忘れ声を張り上げた。もつとも、飲み屋街の夜は賑々しい。花ひとりが叫んだところで音はみるみるうちに歌う声や笑い声に吞み込まれてしまう。

「いいですか！たとえばポケットに入っていた飴を取り出してあげる、っていうんなら私だってありがとうございますって言いますよ！」

「俺にとってはそれくらいの認識しかないんだけど」

佳月の言葉に、花はまたも怒りを募らせれば、か、と目を見開いた。

「そんな壊れた常識を身に纏ってはいつか身を滅ぼしますよ！とにかくです！初対面の人間にむやみに高価なものを譲渡しない！はい、復唱して！」

「ええー、でもさあ、花ちゃん」

抵抗を示す佳月を、花は視線とその低い声音で威圧する。

「橘さん」

「……初対面の人間にむやみに高価なものを譲渡しない」

渋々ながら復唱した佳月を見て、花は満足気に微笑むと、再度巾着袋を彼に差し出す。

「けっこうです。では、これはお返しいたします」

「それは嫌」

「た・ち・ば・な・さん？」

いいかげんにしろ、という言葉顔を顔に貼り付けながら、微笑む。
佳月はその顔にふてくされたように口を尖らせた。

「だって俺達もう初対面じゃないし」

「渡された時は初対面だったでしょう。そもそも貰う理由がありません」

「俺が花ちゃんにあげたかったっていうのは理由にならないの？」

「馬鹿ですか。悪い女に騙されても知りませんよ」

「花ちゃんは悪い女じゃないでしょ」

「そんなのわからないでしょう。これも作戦かもしれませんよ」

「へえ、どんな作戦？」

ずるずると話ぐらかされているとわかっていつつも、花はついつい口車に乗ってしまう。これでは駄目だと首を振ると、再度目の前の男を睨みつける。

「とにかく！好きでもなんでもない男の人から指輪は受け取れませんし、身につけようとも思いませんから。こんな高価なものを貰うのも落ち着きませんし、はっきり言って迷惑なんです」

きつぱりとした口調で断れば、さすがに何も言い返せないだろう、と花は気の早い勝利宣言を心の中で高らかに掲げた。

しかし敗北したはずの目の前の男は、その言葉に特に衝撃を受けている様子もない。少し考えた様子で首を傾げれば、やがてゆつくりと口を開いた。

「でも指輪、気に入ってたじゃない。ずっとケース越しにのぞいて

た」

「！それは、否定はしません、けど」

「だったら迷惑なわけじゃないでしょう？」

「そういうことじゃありません！確かにこの指輪は良いなっと思って思いました。持って帰りたいって思いました。でも！譲渡されるのに抵抗があるんです。橘さんにタダで貰うのが迷惑なんです！」

「そっか……」

うなづく佳月に、やっとわかってもらえたのかと思った花は、ほつと息を吐き出した。しかし次にあらわれた彼の予想外の表情に、花は一步退く。

佳月は、とても人間臭い表情を浮かべて、ただ静けさの横たわる小道へ立っていた。

悪戯っぽく微笑むその様子は、無邪気とも、とてつもなく残酷だともいえるもので、花はどう反応したら良いものかと迷う。

一步退いたまま、その場から動けないでいる花は、後にこの時の判断をなぜ間違えたのか、とたびたび悔やむこととなる。

この紙一重の判断の甘さが、彼女がお人好し、巻き込まれ体質だと言われてしまう所以であろう。

「ねえ、花ちゃん」

「は、はい」

「だったらその指輪、花ちゃんが買ってよ」

「はい！？」

「俺から貰うのは嫌なんですよ？だったら買えばいいじゃない」

「そんな、パンがなければケーキを食べればいいじゃないみたいに言わないでください！」

「あははは」

「笑っじゃなしに！今度は貧乏学生から金銭巻き上げる気ですか！」

佳月の胸倉を掴み怒鳴り散らす花に、佳月はそうじゃないよ、とのほほんとした声をあげる。

「別にいつまでかかってもいいから。少しずつ払ってくれればいいから、ね？」

「……分割払いつてことですか？でも」

「で、担保は花ちゃんね」

「……………はい？」

にこにこ微笑み自身を指さされた花は、わけがわからず間拔けな声をあげてしまう。

「出来る限りお店に遊びに来て？」

「いや、でも」

「指輪、持ち逃げされたら嫌だし」

「失礼な事を言わないでください！」

「それとも月々の払いをいくらか決めようか？」

「だから返しますと何度も」

「でももうそれ、売り物に出来ないし。割りとぞんざいに扱ったでしょう」

「うぐっ」

気になっていた箇所を指摘され、花は言葉を嚥む。

高価なものだとは思ってもおらず、そこまで丁寧な扱いはしていなかった。そのせいか、無意識下でつけてしまった傷などがあってもおかしukはない。嫌な予感にしたものの、そこを言われてしまったては花は反論ができそうもなかった。

「そもそもプレゼントしたものだから俺はかまわないんだけど、花ちゃんは性格上それじゃあ収まりが悪いんでしょう？」

「……私の性格を把握するのやめてください」

「花ちゃんは欲しかった指輪が手に入るし、俺は花ちゃんと頻繁に会えるしで、利害関係一致するし」

「いや、意味がわかりませんよ」

「とにかく悪い話じゃないと思うよ」

畳み掛けるように言われて、花は頭を抱える。そもそも始まりからしておかしいのはわかっていたが、もう指輪が売り物にならないのが事実なのであれば、花は結局責任を取らねばならないと感じてしまう。これはもう性質上の問題なのでどうしようもない。

佳月が言ったように無償で譲り受ける事をよしとする人間ならば、とくにそうしている。それができないというのであれば、もう答えは決まっていた。

「……わかりました。わかりましたよ！分割払いで買います、この指輪！ほんつとーに月々にちよつとしか出せませんよ！」

「うん、それでいいよー、１００円でも２００円でも」

「……さすがに、月々に一万くらいは出せるように頑張りますよ」

がつくりとうなだれる花に、佳月はそれでも一年以上はかかるね、と上機嫌で微笑んだ。何をそんなに弾んだ声でこの男は言うのだろう、と思ったがもうそこを指摘するのも疲れていた彼女は、ははは、と引き攣った顔で笑い返したのであった。

第三話「お人よしのその所以」(後書き)

連載早々申し訳ありません！ちよつと体調を崩しておりました；
長さもちよつと短いものが続いております。ごめんなさい。

第四話「近寄ったのは君か私か」

空き缶がいくつか散乱する部屋にて、響くふたつの声がある。

ワンルームのさほど広くはない部屋の真ん中に、折りたたみ式の卓を囲んでは手作りであろう並んだ品々をつつく女性ふたりは、見た目から受ける雰囲気は大分様子が違う。

一方は控えめな茶のショートボブ、一方は真っ黒な髪をくるんと巻いている。

真夜中なのであまりうるさくは出来ないが、それでも盛り上がってしまうとつい音量が上がってしまうようだ。

鈴を転がすような笑い声と、苦しそうな呻き声。相反する声の主たちはしかしどちらも明るい表情をしているのは変わりなかった。

「それで、結局は相手の要求呑んじゃったんだ、馬鹿だねえ」

ひとしきり笑いがおさまれば、火照った頬をおさえながらはあ、と息を吐く女性は、花の昔からの幼馴染である宮部環だ。みやべたまき

環とは小学生からの付き合いだが、高校が別々になったふたりが程近い距離の大学を受験したのは、本当に偶然だった。

花と同じように実家を出て一人暮らしをしている環は、時折こうしてふらりと遊びにやってくる。環の部屋は花の最寄り駅から三駅先で、どちらかといえば花があちらにいくよりも今日のような機会が多かった。

というのも、環はなかなかどうして自炊をしないので、遊びに行っても物がなにもないのだ。

料理というよりも食に対して貪欲である花は、手間を惜しんで食べる事を省略するような行為はしない。一人暮らしである花の部屋の冷蔵庫は、一通りの食材と調味料が並んでいた。

今日も、並んでいる料理の数々は、すべて花の手作りである。

目の前にある軟骨の唐揚げをつつついて、花は口を尖らせた。

「だって仕方ないじゃん。返品しても売り物にならないってことは結局、無料で進呈されたのと似たようなものだし。欲しいって思ったのは事実だし。だったら買ってもいいかなあつて」

「だからってあんたに支払い義務はないでしょう。確かに怪しい男ではあるけど貰うっていう選択はしなくとも勝手に突っ返しとけば良かったんじゃないの？ 売り物にならないなんて知ったこっちゃないし」

もつともすぎる意見に、花はまたも呻き声をあげる。この友人を前にすると、花はいつも自分のしつかりしている部分などまやかしてしかないと思えてくるのだ。生活力があるとか、ひとから良く相談を受けるとか、そういうことではない。結局、いちばん大事なものは危ない橋をいかにうまく避けられるかで、花は自身にその能力が著しく欠如していることに薄々気付きはじめていた。

薄々、というところがまた、相変わらずのおめでたさではあるが。

「……まあでもいいってことよ」

「ふうん？……ま、あんたが いいならいいけど」

「うん、まあ、危ないって人間的にってことではないから」

言つて、ちびりと発泡酒を一口飲んだ花に、環は嫌な笑いを向ける。その表情にぎくり、と肩を強張らせたが、環はそんな反応に構うことなく新しいおもちゃを見つけたようにからかいの視線を花に向けた。

「なるほど。男として危険人物なわけだ？」

「……………」

「見た目そーんなにかっこいいわけ？ 雰囲気妙に色っぽいとか？」

「……………」

環の言葉に黙秘を貫く花を、ますます面白そうにながめる環は、何を思ったのか途端にころつと態度を変えると、ぐいっと缶の中身を飲み干した。

「そろそろ眠くなってきちゃったし、もう寝ない？」

「な、何急に」

戸惑う花をよそに、環は散らばった空き缶をひとつにまとめはじめる。

「別になんも。洗い物やつちゃっていい？」

「……ありがとう」

訝りながらも、害はないと判断したのか、花は一応お礼を言っ
てゴミ袋を取りに台所へと向かった。

これも暗黙の了解というやつで、毎回、花が料理を作るかわりに環は後始末を引き受けている。がらがらと空き缶を放り込む環の顔をながめても、花は結局その真意がわからなかった。

朝の爽やかな光が差し込む中、不快感に眉根を寄せた花は、睡眠を邪魔する存在を退けようと左手をああいだ。しかし空間には何も行き当たる事無く、空を切った音が耳に届いて、花はますます眉根を寄せる。

そんな花の様子をおかしそうにみつめては、環は容赦なく彼女の掛け布団をひっぺがした。

「花、朝だよー！」

「！？　ちょ、どういうこと」

あまりの出来事に目を丸くする花を、環はぎろり、と睨みつける。

「なに、私があんた起こしたらいけないわけ？」

「だって普段なら私が起こさないと起きないでしょうが！」

「いいから起きろ」

有無を言わさない迫力にぶつぶつと文句を言いつつも花はベッドから身体を起こした。

いつの間にか折りたたんだはずの卓が用意されていて、花はそれにも目をまるくする。

朝食を作るか、との問いに、環は首を振る。花も同様に昨日の酒が残っているようにどうにも胃がもやもやしていた。

味噌汁だけならば飲むか、と訊けばそれにはうなずくので、花はインスタントのそれをマグカップに注ぐためやかんを火にかける。その様子をながめつつ、環は頬杖について窓の外へと視線をやった。

「どっか行きたいの？」

ことん、と目の前に置かれたマグカップと、向かい側に座る花を交互にながめて、環は無言で味噌汁をすする。

「……またしょうが入れてる」

舌についた無視できようがないその独特な味わいに、環は片眉をあげた。花はそれをみて少し溜飲が下がる思いがすれば、ふむ、と少し考えてにつこりと微笑んだ。

「二日酔いには効く、かもしれない」

「そうやって不確定要素でなんとなくやるんだから」

「出たよ、理系」

「うるさい」

理系と揶揄されると機嫌が悪くなる環にあえてその言葉を用い、花はマグカップの中身を飲み干す。台所のシンクにそれを置けば、身支度をしようと洗面台へ向かった。

花の様子をのんびりながめている環は、もうすでに一通りの準備を済ませている。

「……で、どこに行くのさ」

着替えが終わって軽く化粧を施している花の質問に、環は無言でにんまりと笑んだ。

「あれえ、花ちゃん。今日はお友達もいつしよなんだねえ」

にこにこと笑う男を見て、花は頭を抱える。そもそもが昨日の時点でこの可能性を考えなかった自分がいけないのだ。突如豹変した幼馴染の態度を、その意味を見抜けなかった花が負けたということだろう。

頭痛を覚えながら苦悶の表情をする花をよそに、隣に立つ環は興味深そうに佳月をながめていた。

「どうもお、こんにちはあ。花の友人で宮部環といます」

「どうも、橘です」

微笑む佳月に、環は普段の彼女らしからぬ弾んだ声をあげる。それを見て胡散臭そうに花は環を見やるが、見られてる本人はま

るで気にしていない様子で、どこぞの飢えた獣のように佳月に食らいつかんとしていた。

「橘さんて、恋人いらっしやるんですか？」

「いいえ」

「ええー、女性がほっておかなそうなのに！」

「あはは、ありがとうございます。親しくお付き合いしている女性はいますよ」

その言葉に、環のみならず、花もぴくり、と反応した。

余程鈍い人間でなければ、今の発言の真意はそう考えなくてもわかる。暗に特定の女はいないが、それなりに大人のつきあいをしている女性は居る、と言っているのだろう。

一歩下がった花を環は横目で見れば、愛想の限りを尽くした微笑を浮かべて佳月の腕を取った。

「じゃあ、私もその親しいお友達の中に入れてくれたいですか？」

環の言葉に目を剥きながらも、どこか興味深くその様子をながめている花に、佳月はちらり、と目線をやる。

その双眸に花は一瞬身を竦めたが、すぐに佳月がその視線を逸らした。そうしてまた環に向き直ると、佳月も環に負けない微笑を浮かべた。

「もちろんですよ。あなたが私の友人になる事を望んでくれるなら」

言つて、佳月は環に掴まれた腕をそつと外すと、懐から名刺を取り出して環に渡しつつ再度微笑んだ。

環はそれに呆れ気味にため息を吐くと、左手におさまった四角い紙を見る。書かれているのは店名と、おそらく店の番号、それに何

故か携帯電話らしき番号まで書かれていた。

花は、警戒心を剥き出しにしつつ佳月をみつめている。佳月は、その視線を楽しそうに受け止めていた。

「……橘さん」

環の今までとは打って変わった静かな声に、佳月は花に向けていた視線を環へと戻す。そして小さく首を傾げた。

「あなた、花をどうしたいんですか？」

ある種、確信といえなくもないその言葉に、花はついに固まった。そんな彼女へと顔を向けながら、佳月は顎に手をやると、うーんと小さく声をあげた。次に続く言葉を搜しているようだ。

「……どうなんだろうね？」

飛び出した言葉はあまりにも予想外で、花だけではなく環も驚きに目を見開いている。そんな様子のふたりをまるで気にする事なく、佳月は花をみつめたまま発言を続けた。

「とりあえず、花ちゃんには携帯番号は教えないかな」

意外な言葉に一瞬警戒心を解きそうになった花は、しかし次の一言にずっこけそうになる。

「あ、でも花ちゃんの番号は知りたい」

「意味がわかりませんから！」

ずび、とツツコミを入れた花に、佳月はからからとおかしそうに

笑う。

「俺もこれよくわかんないもん。でも会いたいし」

「なんなんですか、その手前勝手な発言はあ！」

「あはははー、花ちゃん顔真つ赤でかわいいなあ」

「本気だしたらアナタたちが悪すぎますよ！」

「だって花ちゃんと会っておしゃべりするの楽しいんだもん」

開き直ったかのように発言を続ける佳月に、花はとうとうがくり、とうなだれると次にはため息をひとつ落とした。

「……まあ、いいですよ。警戒する必要はないんだってわかりましたから」

「え？」

花の発した言葉に、佳月がわからないというように首を傾げる。

花はそれに多少苛立ったのか、眉間に皺を寄せてだから、と続けた。

「私のことを女として見てないってことでしょ？」

「は？」

「は？って、なんですか、は？って」

「……花、あんたそれ本気で言ってるの？」

ぽかん、と間抜けな顔をする佳月と、同じように信じられないものを見るかのように花をみつめる環に、花はわけがわからずに苛立った。

「本気も何も間違っていないはずでしょ」

不機嫌顔で花がそう放てば、呆れた顔で佳月に環が声をかける。

それを受けて佳月は楽しそうに微笑んだ。

「……橘さん、いいんですか？」

「うん、しばらくは都合が良いかなあ」

ふたりのやりとりに今度は花が疑問符を浮かべながらも、しかしそれ以上何かを追及することはしなかった。

ある程度の話をして気が済んだのか、環はアルバイトがあるから帰る、と花に別れを告げた。花も同じ理由から月見堂をあとにしたが、別れ際に「あのひとは厄介かもよ」と環から言われた意味がわからずに、花は仕事中也悩むはめになってしまった。

環と月見堂を訪れた二日後、朝のアルバイトを済ませ月見堂を訪れると、いつものように佳月が店の中ほどにあるパイプ椅子に座っていた。その膝には猫がちょこん、とのっており、花は目を丸くする。

「こんにちは。……橘さん、猫飼ってたんですか？」

「ああ、花ちゃん、こんにちは。いや？ ついさつきふらりとやってきたんだよ」

「へえ……毛並みも綺麗だし、どこかで飼われてるんですかねえ？」

少し毛足が短いその猫は、しなやかな体躯にきらきらとした灰色の毛並みを携えていた。瞳の色は青だ。おそらくロシアンブルーという種類の猫だと思われたが、花も佳月も猫には詳しくないようで、どちらかがその名を口にすることはなかった。

「かわいいですねえ。……しかし、こんな埃っぽい場所にいて大丈夫なんでしょうか」

「……花ちゃん、案外失礼だね」

「いや、初めてこの店来たときから思ってたからね。後ろにもちよつとスペースあるみたいですけど、そっちはどうなってるんです?」

花がちらり、と扉で隔てられている店の奥へと視線をやれば、佳月が同じようにそちらへと視線をやり、次には花を見つめるも、すぐさま視線を逸らした。

「……綺麗だよ?」
「なぜ目を逸らす」

花の言葉に目を泳がせる佳月に、ため息をひとつ落とせば花はつかつかと店の奥へ歩を進める。

「は、花ちゃん」
「この間、お茶を飲ませてくれるって言ったじゃないですか」

制止する声も気にせず、花は扉を開け放てば、そこには小さな水道と、これまた小さな冷蔵庫、それにちゃぶ台らしきものがあつた。六畳ほどある和室には、確かにお茶を飲めるスペースがあるにはある。

しかし水まわりも、ちゃぶ台にも、一体いつからあつたのだ、という洗い物やらごみやらが散乱しており、とてもではないがくつろげる場所とは程遠かつた。

花はめまいを覚えれば一歩よろめき、数秒固まった後勢い良く後ろを振り返った。

「……橘さん」
「は、はい」
「掃除します!掃除用具は!」

「え、えーと、どこにあつたかなあ？」

「……っ家から持ってきてますから！この際です、お店ももう少し整理しましょう」

「えー！」

「別に配置が雑多になつてゐるのはこの際かまいませんから。たまつてゐる埃はどうにかしましょう」

「……はい」

引き攣つた笑いをする佳月に、逃げちゃ駄目ですよ！と花は凄みをきかせて言えば、佳月は背筋を伸ばしてうなずいたのだった。

すっかり掃除が終わつたのは、日も落ちた頃だった。始めたのは昼前だったのに、と花は腕時計を見てはうんざりする。

「花ちゃん、お疲れさまー」

「あ、ありがとうございます」

すっかり綺麗になつた店の奥で、佳月が淹れた日本茶を受け取る手にしている湯飲みも、花がかなり頑張つて磨いたものだ。

一口飲むと、毎日飲んでいるものへの親しみと、それ以上の美味しさが花の口腔に広がる。

「……美味しい」

目を丸くする花に、佳月は優しく笑う。

「へへへえ、ちょっと奮発しちゃった。ね、花ちゃんこのあと暇？」

同じようにお茶を啜る佳月に、花は首を傾げる。

「？ はい、今日はもうなにもないですけど……」

「それじゃ行こうか」

「え？ 行くってどこに」

「今日は俺のおごり」

「えっ」

につこりと微笑んで立ち上がった佳月に戸惑っていれば、佳月がぐい、と花の手を引っ張る。

慌てて靴を履きついていけば、佳月は後ろを振り返って再度微笑んだ。

「おおー、ここ初めて来ます！」

「え、ほんとに？ 花ちゃんこの辺りに住んでるって言ってたから来た事あるのかと思った」

微笑む佳月と並んで入ったのは、街中にあるなんの変哲もないラーメン屋だった。

花は畏まった場所に連れて行かれたらどうしようと思っていたが、こういった場所でもよかったと心底ほっとする。おごりだと言われたが、ラーメンならばそこまで遠慮する必要もないだろう、と瞳を輝かせた。

お互いに目当てのラーメンを注文する際、あ、と花が小さく声をあげる。佳月がそれに気付いてどうしたの？ と声をかければ、何かを言い辛そうに花が口ごもるが、やがて再度口を開いた。

「あ、あのう」

「ん？」

「ぎよ、餃子も食べたらだめっすか！」

握りこぶしをつくって叫ぶ花に、佳月が固まる。

「あ、あの、やっぱ図々しかったですか……す、すみません、餃子は自分で払います!」

「あははははは!」

その言葉を放った瞬間、隣に座る佳月が大きな笑い声をあげた。花はそれにぎよっとして肩を竦めるが、恐る恐る隣に座る佳月へと声をかけた。

「あ、あのー……」

「すみません、しょうゆととんこつと餃子ひとつ」

ひいひいと笑いをこらえながら佳月がカウンター越しに店主へと注文すると、店から大きな声で返答する声が聞こえる。

花はぽかん、と佳月の顔をみつめた。

「餃子くらいもちろんおごります」

「え、でも」

「何をそんな真剣な表情をしたのかわかって。もしかしたらこの店が嫌だったのかなあと思った」

「ラーメン大好きです!」

力強くまたも握りこぶしを作って花が言えば、佳月は良かった、と言って微笑んだ。

その店で食べたラーメンも餃子もとても美味しくて、花はすっかりこの店が気に入った。

「ごちそうさまでした」

「いいええ、どういたしまして。元々お礼のつもりだったから」

「いやー、満腹です」

「本当、良い食べっぷりだったね」

くすくすと笑う佳月と並んで、花は初夏の道を歩く。暑いくらいだった店内から出れば、外は涼しい風が吹いていた。髪をかすめるそれが気持ちよく、花は一瞬目を閉じる。

そうして開いた次には、なぜか花の左手を佳月が握っていた。花は驚いて体を強張らせるが、それを気にすることもなく佳月は握ったその手を自身の口元へと持っていく。

「……指輪」

「え」

低い艶やかな声に心臓が跳ね、花は質問する声がかすれたのがわかる。内心情けないと思いつつも、平静を装う余裕が今の彼女にはない。

佳月の親指が、花の薬指を撫でる。花はそれに再度肩をびくり、と震わせた。

「指輪、してないね」

「え、あ、ああ……高価なものだと聞いてからは怖くて」

「してくれないと、俺としては悲しいなあ」

「……もう自分で払うって決めたんだし、しようとは思ってますよ」
「ふうん、そっか、じゃあ」

うなずいて、佳月は更に花の手を唇に近づけると、佳月の唇が、花の左手に重なった。

小さなリップ音が、静かな夜道に響く。

「指輪を付けるときは、俺に付けさせてね」

もちろんここに、と言って、花の左手をするり、と離れた佳月の顔は、もういつもの浮世離れた表情に戻っていた。

混乱して顔を真っ赤に染め上げる花は、その意味もわからずに、何を言ってるんですか！と怒鳴るのがせいっぱいだ。

月が照らす初夏の夜。出会って間もないふたりの距離が、少しだけ縮んだ瞬間であった。

第五話「その混乱は果たして」

「なんだかんだ、すっかり店内も綺麗になったねえ」

「物の配置は変えてないから、やっぱり埃落とすだけでも違いますね」

ほわん、とした口調で言う佳月に、ふむ、と確かな口調でうなずいたのは花だ。

あの大掃除から三日が過ぎ、あのときよりも更に綺麗になった月見堂に花と佳月は立っている。

今は、はたきを右手に掲げながら店内のちよつとした汚れをばたばたと落としている花を、佳月が楽しそうにながめている。佳月も今日は仕事をする気があるのか、珍しく本棚の整理をしている最中だった。

元々が掃除魔というわけでもないが、花はこの独特な店の雰囲気を感じていぶん気に入っていたのだと今更ながらに痛感していた。でなければわざわざ半日をかけての大掃除などするはずもないし、今なおこんな真似をすることもなかったろう。

面倒見が良いとはいっても、元来みずから足を踏み入れる事が彼女は苦手なのだ。

「あ、これこれ。だめだよー」

はたきで低い位置の棚などを掃除していると、すっかり花と共に店の常連になったロシアンブルーの美猫は、んにゃんにゃと猫らしい声をだし、前足を前後左右にばたつかせながら花めがけてやってくる。

彼女にとって、はたきは気に入りのおもちゃであるらしく、灰色の雌猫は今日も今日とてその本能のままに花の手指に生傷をこさえる。

ていった。

「こらこら、あまりおてんばだといけないよ」

虫干しする本などを選別し、店の前に広げた新聞紙に並べる作業をしていた佳月は困ったように笑いながら灰色猫をひよい、と抱き上げた。

猫はそれが不満であるらしく、ふぎぎや、と佳月へ抗議の声をあげれば彼の懷でじたとと暴れている。

「ほうら、せつかくおまえは綺麗なんだから、そんな顔をしないで」

こちよこちよと佳月が首まわりを撫でてやれば、数秒前の剣幕が嘘のようにロシアンブルーのその瞳をうつとりと細めて、彼女は彼にゆったりと身をゆだねた。

花はその様子を見ては、おお、と感心の声をあげる。

「橘さん、お上手ですね」

「女の子はみんな好きだから」

「いや、訊いてないですよ」

「あはは」

呆れ顔で佳月をみつめる花を、彼は楽しそうにながめる。腕の中でうとうととした猫を見て佳月は微笑むと、今日はまだ座っていなかったパイプ椅子へと腰を落とした。

「この子、やっぱり綺麗だから飼いたい猫なんでしょうけど、首輪がないですよええ」

「ひよつとしたら半野良なのかもしれないね。彼女自身が、完全に飼われるのを拒んでいるのかもしれない」

「はあ、なるほど」

それにしても人懐こいが、と胸中で花は思ったが、あえて言うことでもなからうと言葉にはしなかった。先程ひつかかれた箇所をながめては、今日は傷が少なく済んだと新たな思考に移る。

もう既に断りなく店内奥の部屋へと侵入することを許されている花は、掃除を終えて扉を開けると、靴を脱いで段差になっている上へと足を踏み入れれば部屋の隅にはたきを立てかけた。

蛇口をひねって水を出すと、手を洗う。傷口に染みない事もなくったが、消毒や絆創膏をする程でもない。少しすれば治ってしまうだろう。花はそう判断したのかひとつうなずけばそのまま手をタオルで拭うだけで特になにかを施す事はしなかった。

「……………」

ぴりり、とした手を見て、花はぼんやりと三日前の夜を反芻する。今日はあるときよりももう少し暑く、夜もきつともったりとした空気が外を覆うことだろう。

あの夜、口付けられた左手の薬指は、まるで佳月の体温をそのまま移し込まれたかのように熱かった。いまだ燻っているようなそれを思い出すと、花は途端にあの瞬間を脳裏に描いては頬を染めてしまった。

言われた事の意味を考えれば、それは特別なものを含んでいるのかいないのか。本人に訊くにはあまりに躊躇われるそれを、ともしれば自意識過剰ともとれるその行為をする勇氣は花にありはしなかった。

「花ちゃん？」

意識を飛ばしていた花は、背後から声をかけられて大袈裟に驚い

てしまう。ぎゃ、と短く悲鳴をあげて体を揺らせば、佳月はその反応に驚いて目を丸くした。

「どうしたの？」

「え、い、いえいえ」

「傷の手当てでもしてるのかと思った」

「あ、別にたいしたことないですよ、すぐ治りますから」

曖昧に微笑んで段差のところ立ち止まると、花は靴を履こうと顔を地面に向ける。扉の前で花の様子をのぞいていた佳月は、そつと横へと体を移動した。

花が靴を履き終えて顔をあげると、先程横にあったはずの佳月の顔が正面、しかもかなり間近にあって花は思わず身を一步退こうとしたが、すぐ後ろが扉であるためそれはかなわない。

目を見開いて固まる花に、佳月は真剣な表情をむける。

「……手、ひつかかれたの右？」

「え、いやあの」

「ああ、左か」

はたきを持つ手は右だが、いつも猫を退けようと左手で防御するため、結局実質的に被害を被るのはいつも左手なのだ。

なんでもないことのように花の両手を自身のそれで包み込んで持ち上げては検分を始める佳月に、花はどうしたって狼狽してしまう。男性に全く免疫がないわけではない。男友達は少なくないし、触れ合いもないわけではない。

ただ、女性として扱われるのは極端に慣れない。ということは結局、免疫がないのと同じ事なのだろうか、とどうでもいいことを頭の中で考えていたが、花はあることに気が付けばあれ、と声をあげる。

「猫ちゃんは？」

「花ちゃんが奥にいる間にふらりとどこぞへ消えていったよ。きつとお腹がすいたんだろ？」

佳月の言葉に、そういえばもう昼時なのだ、と花はぼんやり考える。今日は午後から講義がある為お昼を学食のいちばん安いメニューで済まそうと思っていた花は、そろそろ行かなくては、となんとか鈍い頭を正常運転に切り替えようと努める。

「あの、私そろそろ大学へ」

「……そう？」

無言でうなずく花をちらり、と見ただけで佳月は素直に握っていた花の手を離れた。

安堵の息を吐いて花が手をひっこめれば、それを見た佳月は彼女に気付かれないようにくすり、と小さく笑んだ。

店内の隅に置いておいた鞆を手に取り花が振り向くと、何かに気付いたように佳月へと声をかける。

「そつだ、橘さん。これ、今月の分渡しておきますね」

「ごそごそと鞆の中から探り当てられた銀行封筒。中身を察して、佳月は花が差し出したそれをみつめては目を丸くする。

「……本当に払うつもりなんだ」

面食らったように小さく呟いた佳月に、花は片眉を上げて抗議の視線を向ける。それに気付けば、佳月は苦笑でもって花の不満に応えた。

「それじゃあ、確かに」

「中身を確認したら、ここにサインしておいてください」

鞆から取り出された紙には、花の文字で金額と払った日時が記載してある。ボールペンを片手にそれを佳月に渡した花を見て、佳月は複雑な表情で微笑んだ。

「花ちゃんは変なところでしっかりしてるね」

「こういう事はきちんとしておきませんか。あとあといくら払ったかで揉めたら大変です」

「俺はそんな事で揉めたりしないよ？まあ、期限を延ばしたくて誤魔化すことはしたかもしれないけれど」

「はいはい」

悪戯っぽく笑いながら書面にサインをする佳月の言葉を花はまったく信じる事なく、呆れながらその様子を見守った。

きちんと彼のサインが入ったそれを見届けると花はファイルして鞆にしまった。よし、とひとつづなづく。

「じゃあ、明日は学校とアルバイトが立て込んでますんで、また明後日にでも顔出しますね」

「……うん、また明後日ね」

「橘さん？」

微笑む彼の顔が妙に儚げで、花は訝りながらも名前を呼ぶ。佳月は再度微笑むと、いつておいで、と花の頭を撫でた。

「で、結局お前は流されたままなんだ」

「別に流されてるわけではない」

「面倒だからまあいいか、で大半を済ませてるんじゃないやねえの」

悩んで結局購入した105円のメロンパンを齧る花にお昼はそれだけなのか、と佐藤が問いかける。花は据わった目をそのままに作って来たかったが時間も気力もなかった、と答えた。

あれこれと考えて、花は当分節制することに決めた。

花は思ったのだ。彼と長い間時を同じくすることは、危険極まりないのではないかと。

男性として好きかと問われれば、現時点では一笑に付してしまえる。そういう心構えがある。

しかし、と花はここで思う。なんとなくであるが、この先、男性としてではなくとも、たとえ兄のような存在であつたとしても、自身の中で存在が大きくなれば、花は自身が何某かの形で手痛いしつpegえしをくらうのではないかと、どこかそうぼんやりと思うのだ。はつきりと言ってしまえばこれはなんら根拠がない。それでも彼から漂うあの厭世感。自分とは違う世界に身を置く人間なのだとどこか本能が彼女に警鐘を鳴らす。

花は結局、あの男が心情的には嫌いではないのだ。時折戯れのように花に女としての彼女を意識はさせるけれども、それだつてきつと彼の日常に過ぎない。花はもうすでに、自分を彼は女性として見ていないと結論を下していた。あれはもはや、彼の癖というか、あいさつみたいなもの、と決め付けている。

しかしだからこそ余計に、花は彼に対して居心地の良さを覚えてる面がある。あの部屋で飲むお茶は美味しく楽しい。けれども近付きすぎではいけないのではないか。そんな葛藤が彼女の中をぐるぐると駆け巡り、結果とにかく早く支払いを済ませてしまおう、と心に決めた。

もう既に親しくはなってしまうているが、これ以上彼の新たな一

面を知る前に、赤の他人に戻りたい。先程三日前の出来事を反芻したとき、花は心の中でそうかたく決意したのだった。

そこまで考え終えたところで、目の前の佐藤に視線をやる。

彼の言うことはかなり確信に近い。いっさいがっさいが面倒だから、早いうちに逃げ出してしまおう。要はそういうことなのだ。だからこそ指摘されてしまつて花は目の前の男を睨みつけてしまう。

しかし佐藤はその視線の意味をどう解釈したのか、にやにやしながらそんな彼女を見る。

「なーんかお前が男の事で照れてるの見える日が来るとはなあ」

あさつてな佐藤の言葉に花が、はあ？と間抜けな声をあげれば、ますますそれが面白いのか、訳知り顔で佐藤はうんうんとうなずいた。

「そんな深くつつこまいなから安心しろつて。まああのひと大変そうだけど、自分の気持ちに素直になつてみりゃいいじゃん」

「言っている意味が」

「流されてるつてことは、嫌いじゃないつてことなんだし。てことはまあ、好きになる可能性だつて大いにあるわけだろ。まあ頑張れよ」

ご機嫌な調子で言う佐藤の発言は、しかしずれているはずなのに妙に花の心臓を跳ねさせる。途中、わざと言っているのではないか、と思つたが佐藤に限つてそれはなからう、と呆れのため息をひとつ吐けば、佐藤はそれに悩むよなあ、とまたも楽しそうな声をあげる。当分片想いのままなのだろうな、と胸中で思つた花であつたが、言わないで心に留めておく優しさくらいは持ち合わせていた彼女であつた。

「いらつしゃいませー」

フライヤーのスイッチを押しながら、慌しく冷凍庫へと走る。

花は忙しさに目を白黒させながら、コピーをしてくれという客の指摘ににこやかに応えながらレジを抜け出した。

部活生がなだれこむと、店内は途端に賑々しい様子になる。野球部やらサッカー部やらと種類は色々だが、最低10人単位で大体が同じものを買って行く、という特徴は変わらない。

夏場は皆、まるで決まり事のように50円の棒アイスを買っていくし、そうでなければ100円の中からあげを買って行く。

志を同じくする者は趣味嗜好もやはり似るものか。そうでなくとも高校生男子の暗黙の了解なのか。串に刺された30本ほどのからあげを汗だくで揚げる同僚を見て、花はこの瞬間は毎度毎度、祭りのようだ、とどこか現実逃避気味な事を考えていた。

歌の会だか俳句の会だかに所属している女性が、最後の楽譜のコピーを済ませて眉を顰める。文字色の濃さが気に入らないようであったが、店内の喧騒に一応は気遣ってくれたのか渋々といった風情で原稿をしまっていた。

「ありがとうございます」

ほぼ毎日コピーするならおぼえろよおばさん、と内心悪態を吐きつつも、笑顔で客を見送ると花は戦場と化したレジに急いで手助けに向かう。

「お待ちのお客様、こちらのレジへどうぞ！」

声を張り上げた花に、隣のレジにて高校生をさばいていた高田が彼女に微笑んだ。花も苦笑で返せば、ふたりは黙々と長蛇の列がなくなるまでひたすら数字の羅列とたたかっていたのだった。

「いやー、今日いつもよりすごかったですね！」

「なんか試合あったみたいだね。見たことない高校の制服着た子達いたし」

「でもやっぱりみんな買うものは同じなんですね」

「そりゃあ、そうでしょ。チェーン店なんだから置いてあるもの同じだし目移りすることもないだろうからね」

「ってことは全国共通なんですかねえ、あの買い方は」

「日本全般かはわからないけど、この区内では共通だと思うなあ」

売れた商品を補充しながらけらけら笑うふたりを、先輩バイトが声大きい、とたしなめる。ふたりは肩をすくめて仕事に再度取り組むことにした。

高田は最寄り駅がここではないので帰りはいつも電車を利用して。そんな彼が駅前に用事があるという花に、いっしょに帰りましょうと提案して、ふたりは駅まで数十分の道のりを肩を並べて歩いていた。

「そういえば、例の指輪ってどんなのなんですか？」

ふと会話の中で言った高田の言葉に、花はどきり、と心臓を跳ねさせる。

「月みたいな形のだよ。怖くてつけられないから日常的にはしてないけど」

「結局、返さない事にしたんですか？」

「ていうかお金を払う事にした」

「えっ！買っんですか！？」

驚愕の声をあげるのも無理はない。なんせ18万の指輪なのだ。

学生がぼんと払える額では到底ない。

花は特段隠す必要性を感じなかったので、ここまでのいきさつを話した。隣で聞いている高田の顔がみるみる不機嫌になっていくのがわかったが、疑問に思いつつもとりあえずは最後まで話し終える。歩道橋を渡るうと一歩一歩上にのぼり、頂上にひとまず辿り着いたところで、高田はぴたり、と足を止めた。

「……なんで先輩がそこまでしないとなんないわけ」

「いや、まあ、私もさあ、一目惚れじゃないけど気に入っちゃったから」

「え!？」

目を剥いて大声をあげる高田に首を傾げながらも、花が続きの言葉の口にする。

「だってなんか、妙にそられる指輪でさ。私普段、宝石とか興味皆無なんだけどなんでかこれには惹かれてしょうがなかったんだよね」

「! ああ、指輪の話ですか」

「……あんた何と勘違いしたわけ？」

佐藤第二号か、と心の中で呟きつつ半眼になって高田を見やれば、高田は誤魔化すようにあははは、と渴いた笑い声をあげる。それに半ば呆れながら、花は歩道橋の手摺りに背中をあずける。

高田もそれにならって隣に並びつつ眼下の行き交う車をみつめてから、横を向いていた体を花の正面に向き直すと花の顔へと視線を戻す。

「ますます気になるなあ。その指輪、いま持っていないんですか?」「ん?あるけど……」

「えーじゃあちよつと見せてくださいよ」

いいけど、と言って花が鞆を漁る。取り出した巾着袋から花が恐る恐る指輪を出すさまを、高田は興味深げにまじまじとながめていた。落とさないようにと手摺りから多少距離を取り、巾着袋を逆さにした。

手の平にころん、と取り出してのせれば、これだよ、と花が高田にそつと左手を差し出す。高田はへえ、と声をあげてかなりの慎重さでもってそれを持ち上げた。

「綺麗ですね。……でもこれが18万かあ」

「まあ骨董品だからねえ。古いのが価値があるって事なんじゃない？」

私もよくはわかんないけど、と肩を竦める花に、山田さんらしいですねえ、と高田が笑う。

どういう意味なのだ、と問いただそうした次の瞬間、何を思ったのか高田が花の左手を取って持ち上げた。

その仕草には覚えがある、と心臓を跳ねさせた花は、なぜか声を発することもできずに固まった。高田はその反応に満足なのか、微笑んで彼女の手に優しく自身の右手を添えれば、左手に持った指輪をゆつくりと花の薬指に近づけていく。

環が彼女の指をするり、とくぐると、彼女の左手薬指におさまった指輪が、本来の役割を与えられた喜びからなのか、爛々と輝いてみえる。

夕方の日が傾いたこの時間に、花と高田の影はぴったりと寄り添い合っていて、こんな場面で異性に左手をとられ指輪をはめられているのが、花はひどく気恥ずかしいと思えばすぐさま高田から距離を取る。

「ちょ、なんで填めるの！」

「えー、いいじゃないですか。もう先輩のものなんだし堂々と付けて歩いたらいいんですよ。もったいないし宝の持ち腐れでしょ」

「それはそうだけど、そうじゃなく！」

「まあまあ。別に深い意味はありませんって。たまたま左手の薬指に付けたっただけですよ」

ぴったりですね、と笑いながら言う高田に、動揺した自分が恥ずかしいと思えば花は羞恥心で頬をみるみる染め上げていく。歩道橋の上というのもまた何か嫌だ、と花は心の中で言葉にする。まだまだ明るい夏の空では、彼女の表情は歴然で高田は思わずその反応に顔を綻ばせた。

再び花の左手を取れば、高田はふうん、と指輪をながめやった。

「やっぱり人の手に填まるとまた印象が違いますね。こうしてみると確かに月っぽい。石の色もそうですけど、台座のまわりのデザイン、星っぽいですね」

高田の指摘するように、少し錆びた金色の台座に彫られている細工は、どこか夜空に浮かぶ星を思わせる。その真ん中にぼっかりと満月が浮かんでいるような、まさしく月夜を思わせるようなデザインの指輪だ。花は、その不思議な魅力に惹かれて目が離せなかったのだろうか。

「ねえ、トーゴ。今日はどうするの？」

「君が行きたいところでいいよ」

花たちが歩いてきたのと同じ方向から人がやってきて、花と高田は道を塞いでいる現状に少し慌てる。高田が軽く花の手をひいて端に寄れば、ふたりの様子を見た女性がくす、と視線をやって微笑ん

だ。しかし花が目で追った先は、艶やかな栗色の髪をなびかせる綺麗な女性ではなく、その女性を引き連れている男のほうだった。目を丸くしながら、心の中で男の名を呟く。

「可愛いわね、あの子達」

「……うん」

微笑んで女性の腰を抱く男性は、女にひけをとらないほどにやはり整った顔をしている。長すぎる前髪は些か邪魔そうであるが、それすら魅力のひとつのように妖しい何かを放っていた。

凝視する花の視線に応えることもなく、綺麗な男女は歩道橋を確かな足取りで去って行く。

「花さん！」

高田の声に、去って行った先に視線をやって固まっていた花が覚醒する。返事をしようとして、ん？と眉根を寄せた。

「花さんってなに」

「前々から名前で呼びたかったんです。だめ？」

微笑んで首を傾げる高田に、別にいいけど、と奪われた左手を引き抜いて言えば高田は良かった、と息を吐く。

「……さっきの、花さんの知り合い？」

「え、あ、ああまあ。女連れなものには驚かなかったんだけど」

「？　じゃあ何に驚いたんですか」

高田の言葉に頬をかきつつ、花は結局笑って誤魔化した。私達も行こう、と先をうながす彼女を訝りつつも、高田は訊いても無駄だ

ろつと追求することを諦める。

話題転換して談笑をするも、花の頭には先程の女性の声が頭から離れない。

『トーゴ』

なぜ、あなたは、トーゴと呼ばれているのですか、「橘佳月」さん。

心の中でした彼への質問は、当たり前だが返答されることはなかった。

第六話「問うた答えがもたらすものは」

駅前で高田と別れた花は、その足で近くのスーパーへと赴いた。元々の目的は食料品を買い込むことだったので予定通りの行動だ。

眉根を寄せてレタスを選別するその様は、いかにも山になっているものからいちばん良いものを選別しようとしている人間にみえる。実際の彼女との齟齬を、しかし周囲は気付く事なくすり抜けていく。花はひとつため息を落としては、最初に手に取ったものをそのままかごに放り込んだ。店内奥へ進んで行くにつれ、買い物かごの中身はどんどん増えていくが、賞味期限も見ているか怪しい迷いのない動きはやはり誰にも見咎められることなく花はそのままレジへ並んだ。

お金を支払い、商品を袋詰めし、買い物かごをもとあつた場所へ戻す。

「……高い」

眉根を寄せてレシートをみつめ、ぽつり、とひとつ呟いた。無意識に済ませた買い物は、どうやら予定していた予算を超えてしまったらしく、花は苛立ちながらレシートを財布にしまう。

半ば八つ当たり気味に、心の中で男の顔を思い浮かべる。

橘というのは本名ではないのかもしれない。そう考えると先程の映像が頭に再生され、花は気になって仕方なくなってしまう。

人並みの好奇心もあるのだから、それも当然だろうと言い聞かせてはいるが、それにしただって気にしすぎではなからうか、と花は自分に疑問を感じる。小さく頭を振って、なんとか忘れようとしてもなかなか心から離れていつてはくれない。

その理由がどうしてもわからずに何回目かのため息を済ませると、花は家に帰るべく重い足を引きずった。

次の日、花は悩んだ。会ったときどんな顔をすればいいのかわからなかったからだ。ひょっとしたら人違いということもあるが、双子の兄か弟でもない限りそれは苦しい。なにも知らないふりをするのは可能であるが、果たしてそれでいいのかどうか。

今日に限ってアルバイトも学校も休みですることもなく、一日中悩むのも癪だと考えた花は、結局どう対峙するかも決めかねたまま自宅をあとにした。

寝不足の頭はずきずきと痛み、その寝不足である原因が橘佳月であるという事実にも苛立つてくる。

花は、なにに対してそんなに衝撃を受けたのか、眠れぬ夜を過ごした今ならば薄々気付いていたものの、認めるのを拒んでいた。それを受け入れてしまえば、いよいよ彼の存在は花にとって大きくなりつつあると認めてしまったことになるし、彼をある種慕っていると言ってもしまえる。そうなってはもう本能が警告しようがないをしようが抗えない。

現時点でこうやって悩む以上、もう花にとって佳月の存在は無視できないものになっているのであるが、彼女はその点を特に気にしていないいらしかった。というよりか、そこを気にする余裕が今の彼女にはないのである。

嘘をつかれていたかも知れない。彼女が眠れない原因はまさしくそれだった。

自分を偽るということは、佳月が花を踏み込ませないよう予防線を張ったことと同義になる。どころか、彼女の存在を厭っているかもしれない、花はその事実気付いて気落ちする身の内がわかってしまったのだ。

しかしそれを丸ごと認めるのは彼女にとって非常に癪であり、非常に危険。であるから、今の花は周囲から見れば非常に馬鹿馬鹿しいといえなくもない状態でぐるぐるとのたうちまわっている。どこかの彼女の知人が、素直になれば良いじゃん、とけろりとした顔と

声で言いそうなものだ。

自身の心に蓋をする、という行為は、思いのほかストレスになる。無理が生じているのだから当然だ。わからないふりをしているということは、既にわかっているということ、結局は誰でもない自分を誤魔化しきることすらできないのだから、まさしく滑稽である。

と、そんなようなことに思考を沈み込ませてしまったところで、花はまたも怒りの矛先を佳月へと向け始めていた。

『そもそもどつちなよ、あの男は！』

近付いてほしいのか、ほしくないのか。それを考えると、花の苛々とはまらない。自然乱暴な足取りで月見堂に向かっていたらしく、あれだけ悩んでいたのもどうでもいいと思える程に原因である佳月の顔が間抜けであった為、花は途端に毒気を抜かれた。

「花ちゃん、朝から何か嫌なことでもあったの？」

いつものにやかな笑顔はそこになく、パイプ椅子に腰かけたまま首を傾げる佳月に、花は脱力しては、いいえべつに、と答えるくらいしかできなかった。

「……おはようございます」

「おはよう」

ため息混じりにいつものあいさつをすれば、佳月も同じように返してくる。

顔を上げて彼を横切り、せっかくだから掃除でもしようかと店の奥へ足を踏み入れる。

この当然のようにしている行為が、既にふたりがそれなりに親しくなってしまうている関係を如実にあらわしているわけだが、花は

それについては気付いているのかいないのか、はたきを持って店内をぐるりと見回している。まあこの行為がなければ、いよいよ花はこの店でやる事もなくぼうつと過ごしているのは苦痛になっていくわけなので、ひよっとすると目をつぶっているのかもしれない。

「……ねえ、花ちゃん」

「なんですか」

いつものように天井のほう、といっても一番上は届くわけではないが、から埃を落としていくと、開いていたはずの本を閉じて佳月が花に話しかけてくる。

作業の手は止めずに返事をすれば、佳月からは続く言葉がない。疑問符を浮かべつつも、花は佳月のほうへ注意を向けることなく手を動かしていた。

それが気に入らなかったのか、佳月は真っ直ぐに花をみつめていたが、その瞳が段々と怪しいものにかわっていく。半ば睨みつけているようなその表情に、背を向けている花は気付かない。

「!? うわ」

花が驚きの声をあげたのは、振り向いたすぐ傍に佳月がいたからだ。一步退こうとした花の右腕を佳月が掴めば、彼女が手にしていたはたきを取り上げてそこらへんに放つてしまう。

花がそれを目で追いかけて視線を佳月に戻すと、目の前の男は今や完全に花を睨みつけている。しかし視線の意味はまるで見当がつかずに、花は情けない顔をしながら、橘さん?と名を呼んでみた。

「昨日の男、誰?」

「はあ?」

質問の意味がわからずに間の抜けた声を花が出せば、佳月はますます不機嫌顔になる。温厚な彼とは似ても似つかないその様子に多少戸惑いを覚えるものの、時折みせる子どもっぽい仕草も知っていたので花はそこまで驚かなかった。

しかし、やはり理由を察することはできないし、そもそも昨日の男という聞きなれない単語の意味もわからない。花はなんのことであろうか、と視線をさまよわせる。恐らく昨日、というのは花が固まって凝視してしまった例のあの場面のことであろう。目下、彼女が悩んでいる原因である。

まさか佳月のほうからふられるとは思わずに、その事にも驚いていた花であったが、今はとりあえず質問を消化するほうが先だ。そのときの事を反芻して、昨日の男の正体を突き止める。

「……ああ、ひょっとして高田君の事ですか？」

自分の言葉と、佳月に掴まれている右手を視界に入れた途端、その直前の出来事を思い出して、花は気恥ずかしさに頬を赤らめる。

佳月の一件が衝撃すぎてすっかり記憶の彼方だったが、そういえば高田から人生二度目の異性から左手の薬指に指輪を填められる、という経験をしたのだ。

花は歩道橋の上での高田とのやり取りを思い出せば、自意識過剰な反応をしてしまった自分が恥ずかしく、なんだか居た堪れない思いだった。

花が頬を染めた瞬間を目撃した佳月は、睨んでいた顔に眉間の皺を足せば、花の右手におさまる指輪を引き抜いた。

「あの男の子、花ちゃんの彼氏？」

「は？なんで」

「だって指輪填めてもらってたじゃない。左手の薬指」

こうやって、と呟いて、佳月は花の左手に指輪をおさめる。さすがに二度目、高田との行為をいければ三度目のそれには花は何の感慨も起こすことはない。

佳月にされたその行動の意味がわからずに、ただ首を傾げた。

「別に彼氏じゃないですけど」

「彼氏でもない男に指輪を填めてもらったの？」

「橘さんだって同じ事したじゃないですか」

「俺はプレゼントした人間なんだから当たり前でしょ」

そういうものなのか？とますます疑問符を浮かべる花だったが、とりあえず逆らうのは得策ではないと思えば、とりあえず、そうです、と彼の言葉を肯定した。

「俺以外の男からこの指輪を填めてもらっちゃ駄目だよ」

「……はあ、すみません？」

「次同じことしたらお仕置きだからね、わかった？」

「……はあ、わかりました」

いまいちゃわかっていない、なんとも気の抜けた返事をする花であったが、それでも佳月は多少満足したのか、花の手を離すといつものと同じように微笑んだ。

結局ほぼ佳月の発言の意味がわからないまま、花は椅子に戻る佳月をながめていたが、今のタイミングならば訊けるかもしれないと思えば、橘さん、と彼の名を呼んでいた。

「なあに？」

花の言葉に歩を止めて振り向く佳月に、花はごくろ、と唾を飲み込む。

「トーゴって、橘さんの本名ですか？」

「違うよ」

「そうなんで、ってえっ!？」

なんの躊躇いもない即答にすつとんきょうな声をあげた花は、答えてくれないかもしくは肯定の意である返答しか予想しておらず、予想外のそれに驚愕するしかない。

花の大声に目を丸くする佳月に、胸中で、いや驚いてるのはこっちです、と花はつつこまずにいらなかった。

「名前を呼ばれたくないんだ」

ぎし、という音がして、意識を飛ばした花は覚醒する。見れば佳月はパイプ椅子に腰を下ろしていた。花は彼の表情を確認するようにみつめる。笑ってはいるが、目はどこか寂しそうだ。

「でも、名無しだと不便でしょ？だから女の子達に訊かれたらトーゴだよ、って言うの」

「じゃあ、橘さんも仮名なんですね」

花の言葉に、佳月は再度目を丸くして首を傾げる。まるで、何故そんなことを訊くんだ、と言っているように。

「橘佳月は、俺の本名だよ」

「え!？」

「花ちゃんは俺の名前の意味知ってるよね」

「? はい」

前に、佳月の名前は満月という意味がある、というような会話を

した事を思い出して、花はうなずく。それに佳月もうなずいて微笑めば、花の心臓はなぜか跳ねた。

「だからトーゴなの。ほら、満月って十五夜でしょ。十五だから十に五でトーゴ」

「ああ、なるほど。……って待ってください」
「ん？」

ぱん、と謎が解けたというように手と手を打ち鳴らした花であったが、次なる疑問が浮かぶ。それをまた抱えて悶々とするのは嫌なので、間髪いれずに訊いてしまおうと花はまったをかけた。

佳月は、花の次の言葉を促すように首を傾げて花と目を合わせる。花はそれを真っ直ぐに受け止め口を開いた。

「なんで私に本名を教えたんです？」
「呼ばれたいからだよ」

さら、と答えられたそれに花はなんとなく齒軋りしたい思いで、小さく呻り声をあげる。頬が赤くなっていまいかと怖がる自分のその思考が嫌で、花は眉根を寄せながら次の言葉を口にした。

「……矛盾してませんか」
「してない」
「だって、呼ばれたくないんでしょう」
「女の子達にはね」

佳月の言葉に花は片眉をあげれば、少し面白くなさそうに声をあげる。

「生物学的には私は女なんですけど」

「違うよ」

「はい？」

「花ちゃんは花ちゃんでしょう？山田花」

「……そりゃそうですけど」

「俺は、女の子達には呼ばれたくないけど、花ちゃんには呼ばれたいの」

意味深い言葉の数々に、花はどう反応すれば良いのかわからず固まった。こういった言葉遊びは苦手で、その意味を考えるのも頭が痛くなる。花はいつものように面倒、と片付けてしまっている項目のものなのかを考えてみたが、どう頑張ってみても面倒臭いからいいや、と捨て置いてしまえるものではなからう、とおめでたい彼女の脳みそでもそう結論を出すほかなかった。

「昨夜の女性とは、その、お付き合いをしているわけではないんですか？」

「しているけど」

「……恋人なのに本名を教えないんですか？」

「お付き合いはしているけど恋人じゃないよ」

「意味がわかりません」

「色々なところに付き合ってるし、夜も一緒にいるけれど、恋人じゃないよ」

佳月の回答に合点がいった花は、ついに苛立ったのか顔を真っ赤にして声を張り上げた。

「紛らわしい言い方をするな！」

「あははは」

「あははじゃありません！別に橘さんの人生ですから良いですけど、いつか刺されても知りませんよ！」

「そういうんじゃないから大丈夫だよ」

「もうほんつとくに意味不明！」

憤慨する花を笑う佳月に、花は何故自分には名を呼んでほしいのか、と問おうとも思ったが、あまりにも核心を突きすぎる気がして、花は結局それを訊くのをやめてしまった。

どういった意味であつても、しっぺがえしの領域に入ってしまったい
そんな気がして、それならば無知で鈍い女のままでもいい、と花は願ってしまったのだ。

第七話「見え隠れする感情」

路地裏の小道に位置する月見堂は、その外観も背景も穏やかとしか言いようがなかった。朝方に訪れれば柔らかな日差しが昔さながらの店を優しく包み込み、後ろの細い細い道からは、今にも猫が飛び出してきそうである。実際、月見堂には通い猫がいるわけであるが。

とにもかくにも、ゆつたりとした時間が流れるその場所で、山田花は何故か実に落ち着かない数日を過ごした。

月見堂の店主である橘佳月は、その店そのものと言っていい常人よりも遅い時空で生きているような人間だ。微笑みもいかにも無害そうな優しいものである。

しかし花は、その微笑を警戒し、その男そのものを警戒し、店に近寄りたくなくとさえ願った。

彼女の読みは見事に当たり、どうも厄介な男であるとわかった現在。佳月という男の輪郭がやっぱんとぼんやり見えてきた昨今、月見堂に赴いても特に何かが起こる事もなくなってきた。

花はやつと落ち着きを取り戻そうとしている。

元々、趣は嫌いではなかったし、佳月が猫を愛でる姿もどこか落ち着く。何もなければ、花の佳月に対して抱く感情は好意的だ。

気付けば初夏だったはずがじりじりと本格的な夏の訪れを感じるようになり、花は月見堂に顔を出すようになってからもう一ヶ月弱程の時間が経過したのだと気が付いた。

「夏って嫌ですねえ」

花の呟きに、佳月はおや、と目を丸くする。

この月見堂にはもちろん冷房などという文明の機器はなく、花と佳月は店の売り物であった和紙で出来ているうちわを片手に涼を繕

っていた。

「意外だね。若い子ってみんな夏が好きなものだと思っていたけれど」

「暑くて苦手なんですよ。泳ぐのとかもそんなに好きじゃないし……あ、お祭りは嫌いではないですけど。そういう橘さんはおいくつなんでしょうか？」

「26歳」

さらに、と答えられてしまった事に、今度は花が目を丸くする。しかし、と花はそこでいったん思考へと身を沈めた。反芻してみれば、彼は花の質問に言い淀んだ事などほぼなく、彼女が訊けば大抵はきちんと回答してくれていた。花はそれを思い出してはそうかとひとりうなずく。

その様子が可愛らしいと感じたのか、空気を揺らして佳月が微笑んだ。

「じゃあ、今年で27になるんですか？」

「いや、5月生まれだから。花ちゃんは？」

「私は21です」

「花ちゃんて大学何年生？」

「三年ですけど」

「じゃあ花ちゃんも誕生日早いだね、いつ？」

「……いいじゃないですか、別に」

言い淀む花に、佳月は悪戯っぽい表情で笑めば、うちわを扇ぐ手を止める。立ち上がる佳月を予測していたかのように猫が彼の膝から下り立ち、その数秒後にパイプ椅子から腰を上げた佳月は、含んだ笑顔のまま花へと近づく。

花はその様子に一步退けば引き攣ったような笑みをみせる。お互

いに浮かべている表情は「笑顔」という言葉でありながら、その中はまるで違う。人間というものは、複雑なものだ。

そんな複雑な様相を呈しながら、ふたりの距離はじりじりと縮み、花は棚を背につつかえ、追いつめた佳月はますます笑みを深くする。

「ねえ、花ちゃん？」

「……なんでしょう」

「また俺が花ちゃんに何かあげるとか思ってる？」

「だって、橘さんてひとに物をあげるの趣味なんじゃないんですか！？」

もはや数センチの距離にまで迫る佳月の顔を直視することが花は出来ずに、思い切り目を逸らしながら泣きたいような思いで叫んだ。佳月はその様子がおかしいと思えばくつ、とどこか酷薄な忍び笑いをもらった。

「花ちゃんは、さ」

静かな、いつもとどこか違うその声のトーンに、花は体を強張らせる。それを無表情に見ながら、佳月は花の顔横にとん、と手をついた。

「俺のこと、何者だと思ってる？」

「……え？」

「俺は、なんだと思う？」

半ばパニックになりかけた花は、冷静さを取り戻すことなく彼の質問の意味を考える。とにかく答えなければ、と気ばかりが急いて、咀嚼する間もおくことなく叫んだ。

「橘さんは、ただの変態です！」

震える声音で響いた花の言葉の後、月見堂が立つ小道はいつもの静寂を取り戻していた。

迫る佳月の動きが止まったことを不思議に思いながら、花はいつの間にか固く閉じていた目を恐る恐る開く。

「た、橘、さん？」

小さく呟いて花が佳月の顔をうかがうと、次の瞬間、佳月が大声を上げて笑いだした。ついにはこらえきれないといわんばかりに壁をばんばんとたたき出す。驚きに花が固まっていると、いまだ抜け切らない笑いに肩を揺らしながら、佳月は小さくごめん、と呟いた。

「花ちゃんて、いいなあ」

お茶飲もう、と言って、そのまま佳月は奥に引込む。

花はそれに啞然としながら、本当に彼という人間はわからない、と心底感じたのであった。

「おはようございまーす」

出勤すると、レジから同じようにあいさつの声がきこえる。花は視線をやるとメンバーの中に高田も含まれていた。平日の昼はやはり主婦層の人々がシフトに入る事が多い。

パートのおばさん、と呼ぶにはまだまだ若い同僚達に改めて挨拶を交わしながら、高田へと視線をやった。

「珍しいね、今日は中番なの？」

「どうしても出ないとまずい授業とかぶちゃったから交代してくれ
って言われたんですよ」

少しむつつりとした口調でそう言う高田に、花はひとりの人物を
思い浮かべて苦笑をもらした。

「ああ、末次君？」
すえつく

「あいつしょっちゅうそんなだから困りますよ！」

「まあ、一応他の日と交換でだからいいじゃない」

「それさえしなかったら人格を疑います」

「あはは。じゃあ私着替えてくるねー」

笑いながら花がバックヤードへと向かおうとすれば、高田が後ろ
から声をかけてくる。不思議に思ってふりむけば高田が小さく首を
傾げた。

「花さん、金曜日はバイト？」

「金曜？ うん、中番」

「じゃあ夕方あがりか…次の日は？」

「休みだよ」

「じゃあ金曜、仕事の後なにか予定あります？」

「んー、まあ、予定って程じゃあないけど」

花は月見堂に寄るのがもはや日課のようになっている為、あえて
それを言葉にはしなかった。

その彼女の言葉にぴくり、と反応した高田は、片眉をあげて次の
言葉をうながす。

「なにかあるの？」

「？ 月見堂に行くんだけど……なに、なんで睨むの」

「……けっこう頻繁に行ってるんだ？」

「え、ああ、まあ……」

上から見下ろすように睨まれるのは、身長があまり高くない花にとってけっこうな恐怖になる。後輩になぜびくつかねばならん、と心の中で呟きつつも、口にはできない花は自身を情けなく感じた。

そんな花の様子をわかつているのかいないのか、小さく息を吐いて剣呑な雰囲気を取りあえずおさめた高田は、わかりました、と続きを話す。

「実は花さんに相談があつて、金曜日に飲みとかどうかな、と思つてただけどだめですか？」

「ん？ かまわないけど。相談つてふたりで？ 何、どうしたの。なんなら今日電話しようか？」

ふたりきりで話したいという後輩を前に、花は先程の恐怖を忘れれば心配気に眉を顰める。高田はその様子に小さく笑えば、ゆるゆると首を振った。

「いえ、そこまで切羽詰っているわけじゃないから大丈夫です。じやあ、その日いっしょに月見堂行つてもいい？ 実際に会つてみたい」「ん？ いいけど。じゃあ、あがる時間にここで待ち合わせにしようか。どうせ駅からよりここからのが近いし」

「そうですね。そうしましょう」

うなずいて微笑み合うふたりに、同僚達は怪しいと勘繰っていたが否定するのも面倒なので花はそのまま捨て置いた。

心なしか嬉しそうな高田に首を傾げながら、今度こそ花は着替えにバックヤードへと消えていった。

週末ということもあって、金曜日というのは忙しい。飲食店でもないのになぜコンビニのような店も混むのだろうか、と花はこのアルバイトに就いてから時折考えるが、やはり週末に家でちよつとしたご褒美を食したい、という庶民のささやかな楽しみなのだろうか、と面白くもなんともない無難な結論をくだしていた。

他のアルバイトに訊いても答えは似たようなものなので、花はそれ以上真剣にこの事について考えようという気概は持たなかった。

「お疲れさまです花さん」

言われて差し出されたのは、花が好んでよく飲んでいるプラスチックカップ型のココアだった。

仕事が終わりにバックヤードで着替えている間に、高田が気を利かせて買ってくれたらしい。花は目を丸くして次には微笑めば、素直に礼を言つて受け取った。

同僚どころか店長にも嫌な笑いを向けられそうな気配を察すれば、花は高田の背中を押して早く出よう、と急かす。高田はその様子におかしそうに笑いながらも、おとなしく花の対応に従った。

「やっぱりさー、お礼も過ぎると迷惑つてもものだよね」

「なんですか急に」

「んー」

店を出て並んで歩き出せば、花が急にそんな事を呟いたので、高田はくすくすと笑って彼女を見る。花はそんな高田に生返事をしつつカップにくつついていたストローを外すと、次には蓋にぶす、と突き刺した。

ずずず、とストローからココアを吸い込みつつ、花はカップを持つていない左手を視界に入れる。口に広がる味は慣れ親しんだもの

で、疲れた体に甘いものはとてもありがたい。花はこのくらいの好意ならば素直に受け取る事ができるのに、とまた蒸し返しそうになった色々な場面をなんとか振り切ったため息を吐いた。

「だってさあ、18万だよ」

「ああ、そのこと。俺の158円と比べますか」

苦笑する高田に花は最後の一滴を惜しむかのようにずず、と音を立てた。行儀が悪いとわかっていつつも、音を立てるまで飲んでしまふ。花にとってこれはそういう存在の飲み物なのだ。

飲み終えて、たまたま通りかかったやはりコンビニエンスストアに、悪いと思いつつ飲み終わったそれを外付けのゴミ箱に放った。自身がアルバイトをしていると、どうしてもその店のものではないゴミをそこに捨てるのは劣悪な気が花はしてしまふ。それを苦笑交じりに高田に伝えてみれば、高田も似たような感覚をもったことは何度かある、と答えた。

「ごちそうさまでした。だからさ、こっちのが単純に嬉しいっていうか。しかも赤の他人からなんて怖いだけじゃない？」

「ああ、まあ。そうですねえ……特に指輪なんて、それこそ好きな相手じゃなければ迷惑なだけだろうし」

「そうそう」

ため息を再度吐きながら、花はこっち、と告げて道を指し示す。佐藤の時と同じように、こんなところに店があるのか、と目を丸くしていた。

「こんばんはー」

「こんばんは、花ちゃん。……そっちの子は」

「アルバイト仲間の高田君です」

花は微笑んで高田を紹介した。

高田と佳月は同時になにかに気付くと、一瞬目を細める。お互い、あの歩道橋の男だ、と認識すれば、無言で微笑んでどちらかともなく会釈をした。

「高田です。花さんにはいつもお世話になってます」

「どうも。私も花ちゃんにはとてもお世話になってますよ」

笑い合っているのに、なぜか張り詰めた空気が流れている。花はそれを感じ取り首を傾げたが、結局理由らしい理由は思い当たらずに、そのまま奥へ進んだ。

はたきを手に取れば、花は店内を見渡して呆れ返る。相変わらず、この店を綺麗にしようと心がけるのは彼女だけであるらしい。2日程来ていないだけで隅の方にはもう埃がたまっていた。

棚はこまめにやっているだけあってまだまだ綺麗だ。高田を待たせるのもあまり良くないと考えれば、花は、はたきからワイパーに切り替え床掃除を手早くやってしまおうと動き出した。

「花さん、なんで店内清掃なんてやってんの？担保の一環？」

「まあねー。ちょっと待ってて、すぐ終わるから」

「俺も手伝いましょうか？」

「いいよ大丈夫」

仲睦まじいふたりの様子を、佳月はぼんやりとながめる。いかにも初々しいカップルといった風情だ。

やがて忙しく動く花の邪魔になると思ったのか、花の傍から離れて高田が店の外に移動してきた。佳月も床掃除ならば自分は邪魔だろう、と腰を上げた。パイプ椅子がきしり、と音を上げる。

高田の隣まで移動してきた男を、高田はちら、と横目で見る。視

線を多少上にしなければならぬのが癪だと感じれば、高田は小さく舌打ちした。彼自身も背は決して低いほうではないので、余計苛立ちが強くなったのだろう。

「……あんだ、ちょっと勝手なんじゃないの」

低く小さく呟かれた声に、佳月は一瞬反応が遅れる。すぐ横の彼に言われたのだと気が付けば、ふ、と空気だけで笑んだ。

「君はとても格好良いね」

「馬鹿にします?」

佳月の言葉に高田がますます声を低くすれば、いや、と佳月が首を振る。

「欲しいと、素直に感じて、素直に受け入れられて。彼女の事が好きなんだと、考えるよりも感じているんだね」

「……まあ、子どもですから」

「ああ、しがらみなんかは俺と比べれば少ないんだろうけど。でも、ないわけじゃないだろう? 君と彼女は同僚なのだし、なかなか後先考えては行動しきれない」

花の動きを目で追いつつそう話す佳月の顔を、高田は見つめた。

なんとかその心を読み取る事はできないだろうか、と必死にその瞳の奥を探る。しかしそれはとても難しい問題のようで、学生である自分には到底わかりそうもない、と自覚してしまうのが悔しかった。高田は、諦めるように佳月から視線を外せば、同じようにくるくと動き回る花を見つめる。

可愛い、と呟いて微笑んだ佳月と同時に、高田は心の中で同じ言葉を考えていた。

「……あんだ、よくわからない」

素直と言ふのなら、今の発言のがよほどそうなのではないかと感じて、高田は声にする。そんな高田に佳月はくすくすと笑った。

「終わった！高田君、おまたせ」

「いえ、そんな待ってないですよ」

店の奥にいったん用具を置いて、花は高田の前に立つ。それに首を傾げながら、佳月は花へと声をかけた。

「このあと予定があるの？」

「ええ、高田君とちよつと。そんなわけなんで、今日はこれでお暇しますね」

「……そう」

佳月の哀しそうな瞳に花は首を傾げたが、何かを言葉にすることはなかった。花さん、と高田に呼ばれて意識をそちらにやれば、花はうなずいて歩き出す。

ふたりの背中を見送りながらパイプ椅子に腰掛けた佳月は、気付けば携帯電話を取り出していた。

どこかに電話をかけている佳月の耳に、猫の鳴き声が聞こえる。

姿こそみえないがいつものあの猫だろうか、と考えれば、心を支配する感情に行き当たってしまったかのように気まずくなり、佳月は苦笑する。それでも、彼が電話を切る事はなく、そこでまた自身に苦笑せざるをえなかった。

「情けないな」

呟いたその声を、果たしてあの猫は訊いていたのか。

佳月は途切れたコール音に安堵して微笑めば愛しそつに電話口の相手に、やあ、と挨拶をした。

第八話「動き出したもの」

学生同士が行くには馴染みやすい、某有名チェーンの居酒屋にてふたりは向かい合って腰掛けていた。

花はちなり、と前に座る高田に視線をやると、彼が微笑む。とりあえずそこまで深刻でもないのだろうかと思えば、花は胸中で安堵する。

思えば、花は高田から相談事を受けた経験が今までになく、だからこそ余計緊張していたのかもしれない。彼がどこか生真面目な部分を持ち合わせているのも知っている分、あまり考えすぎないと良いのだが、と心配だったのだ。

「なに飲みます？」

「ウーロン茶」

花のその言葉に高田が小さく首を傾げた。

「お酒飲まないの？」

花は苦笑して、話を聞いてからね、と応える。いつもしている事だ。

彼女自身、決してお酒に弱いわけではない。けれどこうやって改まって話があると言われた時は、花はいつもきちんと話が終わるまで飲むのを避ける。相談されそれに対して何か答えようとした際に、酒の勢いで余計な事を言ってしまったようにという花なりの配慮だ。

花もじゅうぶん真面目といえる人間であるが、花はそれ程に自身を真面目だとは評していない。それは彼女が全てにおいて四角四面に受け取るような性格ではないからなのかもしれず、ある程度の柔

軟性があるからこそ更に多くの人間からあれやこれやと厄介事を持ち込まれてしまう事実を、これまた彼女はわかっていなかった。

その答えに何を思ったのか高田が微笑むと、じゃあ俺も、とふたり揃ってウーロン茶を注文した。

アルコール抜きでお疲れのあいさつをするのは些かぬけていると思わないでもないが、とりあえずふたりは一口ずつそれを流し込み、適当に頼んだつまみ類をつつつきはじめた。

「花さんはさあ」

「んー？」

「あのイケメン店長のことどう思ってるの？」

「どう、って？」

「そのまんまの意味」

唐突な高田の質問に目を丸くする花であったが、佐藤に訊ねられるとああも苛立つのに、彼に訊かれるとそう心が波立たないのは何故なのか。花は苦笑しながらもひよっとして相談事とはそちら方面の話なのだろうか、などと過ぎりつつ、ううん、と声をあげて眉根を寄せた。

「なんとも思っていない、っていうのはまた違うと思うけど……」
「けど？」

先をうながすような視線を向けられ、花はひとつため息を吐いた。

「あのひとはなんというか、そういう、うーん、恋する相手としては最悪なひとだろうなっていう認識で、でも男性として見なければいいひとだなあって思う、かな」

「ああ、このまえの女性って、ひよっとして恋人じゃない？」

「気付いてた？歩道橋ですれ違ったひとだって」

苦笑する花に高田がうなずくと、花も同じように首肯する。

「そう、不特定多数って感じみたい。でもそれはだから、まあ、自分に害が及ばなければいいのかなというか」

「……なるほど」

高田が花の言葉を咀嚼するように自身のあごに手をやる。花はそれをぼんやりとみつめながら、次の言葉を待った。

「花さん」

「ん？」

「俺ね、花さんが好きだよ」

「……はい？」

ふいに呟かれた言葉を、花は俄かには信じられず、苦笑とも単なる微笑ともとれる曖昧な表情を作っては、問うように高田の顔を見つめる。

そんな花の視線を受けた向かいに座る高田は、泰然とした様子でゆったりと口角をあげて笑んでいた。

「……冗談？」

「で、済まそうと花さんがするんなら俺はそれなりのことをしますけど」

「なにそれ」

「訊くってことは、俺はそれをしてもいいの？」

微笑みも消して、真剣な双眸が花を射抜いたと思えば、テーブルに置かれた彼女の右手を、高田が自身の左手で握りこんだ。そのとき、一瞬薬指を擦られたのに気がついて、花はその艶を感じる高田

の仕草に羞恥を覚えれば慌てて右手を引き抜いた。

アルコールが入っていないため、顔を赤く染め上げていても何のせいにもできない。花は胸中でこんなことならば、とそれを後悔した。

高田はその表情にすっかり気を良くしたのか、男の顔をそのままに、もう一度微笑んでみせる。それを視界に入れた瞬間、おかしいくらいに花の心臓が跳ねた。

「あの、高田君」

花が何事かを口にしようとする、先手を打つかのように高田がそれにかぶせて声を上げる。

小さくかぶりを振って、彼女の発言を封じる事を強調した。

「今は具体的な返事はいりません。……花さん、好きなひとかいる？」

「……いない」

「だったら、急いで断る理由なんてないでしょう？これから俺と、色んな事しましょう。それでも駄目なら、それでいいです」

「でも、そんな期待を持たせるような事」

「花さん」

再度塞がれた言葉に、しかし花は不機嫌になる事も、困惑することと出来ずに固まってしまふ。射抜かれるように花を見つめるその瞳を真正面から受け止めたのでは、それも当然かもしれない。

「俺、可能性がゼロじゃないんなら縋りたいんだ。あなたの事が、好きだから」

「……………」

「もしも結果が、俺の望むものにならなくても、俺は花さんを責め

たりしない。だから、今断るのだけは勘弁して」

「……高田君、私は」

「お願い」

「……つごめん、私はやっぱり、無理！お試しで、とかそういうことが出来ない！今の時点で高田君は私にとってかわいい後輩で、それ以上にはならない！」

「でも、ときどきしてるでしょ」

「！」

「俺に好きだって言われて、今俺と向かい合って、花さん真っ赤だよ。すっごく可愛い女の子の顔になってる」

言葉の数々に顔を赤くする花に、高田はくすり、と空気を含んだ笑みをひとつ落とせば、席を立つと花の隣に腰をかがめる。

花は近づいてくる高田に狼狽すれば、ずり、と右に寄ったが結局横は壁なので、追い詰められてしまえば全く意味はなかった。

赤くなる花の耳元にそっと唇を寄せると、高田はとろり、と愛の言葉を囁いた。

「好きだよ、花さん」

「！わぎゃっ」

リップ音が花の耳にも届いた。

頬に寄せられた高田の唇の感触に、思わず声をあげた花に、高田は今度こそ声をあげて笑う。

「花さんの悲鳴、色気ないー。でもそういうところも可愛いなあ」

「だから君はなにを言って」

「諦めないから、俺」

「！」

「もう、「かわいい後輩」演じるつもりはないから、覚悟しておい

て、ね、花さん」

そう高らかに宣言する目の前の男が、果たして本当に自分の知っている後輩なのか、花はわからなくなってしまうそうだった。

帰り道は、ひとりで帰ろうとする花を引きずって、結局は強引に高田に家まで送られてしまった。

花の頭の中はどうしたって混乱していたし、想いを告げられ断った相手に家まで送り届けられるのはなんとか避けたかったが、案外、押しに弱い花は結局アパートの前で高田と別れるはめになる。

帰り際の彼に、花は再度断りの文句を並べ立てたが、高田は意味深に笑い、別れの挨拶をするだけであった。

部屋に入った瞬間に脱力した花は、真っ先に壁際のベッドに倒れこむ。ため息を吐いては、うつぶせていた体を動かしてああむけにすれば、天井をぼんやりと見つめる。

『好きだよ、花さん』

過ぎった高田の言葉に赤面すれば、とりあえず今日はもう考えるのを放棄してしまおう、と花は立ち上がり風呂場へと向かった。

なかなか寝付けないかと思いきや、花はシャワーを浴びた後、髪も乾かさず気付けばベッドで意識を手放していた。自身の図太さに若干呆れながらも、花はのろのろと冷蔵庫を開く。

気に入りの野菜ジュースを取り出して、扉を閉めれば、パツクジュースのストローを外して差込口にぶす、と突き立てた。

喉を鳴らして水分を摂取している最中、花はぼんやりと今日一日の予定を考える。このまま家の中にもなんだか余計な事ばかり

考えてしまいそうだ。そういえば、飲み終わり平たく潰した紙パツクをゴミ箱に放り、大口であくびを盛大にしながら洗面台へと歩を進めた。

花は、この家がそこそこの家賃で、そこそこの物件なのだと毎日感じていたが、唯一、洗面台があるのはなかなか気に入っていた。一人暮らしの貧乏学生の部屋には、案外それが備わっていないことが多いのだ。

そんなお気に入りの場所で顔を洗い、ふう、と小さく息を吐き出せば、鏡に映る顔を花はじ、とみつめる。

「……なにが いいのやら」

苦笑すれば、目の前の人物も花と同じようにそうしてみせる。毎日同じ顔を見ていても、彼女が彼女自身をひとよりも可愛いだとか、美人であるとか、そういった感情を持った事はただの一度もない。そんな花にどうして高田が好意を持ったのか、花にはやはりわからない。顔ではない、と言うものの、すべてではないと言ってもやはり担っている部分はあまりに大きい。

花はそれを思えば、やはり人様に好意を抱かれる自分を想像するのは苦しかった。

悶々とした気分を抱えそうになり、思わず花は頬を両手でびしゃりと打つ。小さくよし、と呟けば、毎日の日課になりつつあるあの場所へと向かおうと決めた彼女だった。

じりじりと日差しが照りつける道を、日焼け止めをきっちり塗った肌で歩く。日本の夏は、湿気もありかなり不快であると訊く。外国に住んだ経験などない花だったが、その言葉を聞きたびに、からりと晴れたどこぞの国に思いを馳せた。

閑散とした、夜には水を得た魚のように蘇る、いつもの道を歩きながら花はぼんやり考える。何が正解なのか、わからない。

高田の告白を何度否定しても、彼は諦めないという。それならば、想う相手がいないのなら、それこそ付き合ってみるという行為を試してみても良いものなのだろうか。

どこか生真面目で初心な花は、どうしても好きから始まる恋でなければ違和感がある。

大人になればなるほど、そういった形のもののほうが稀少であるとかわかっていたが、それでも花は自身の気持ちに素直でありたい、と結論を下したのだ。

はてこれ以上どうしたものか。
すっかり困ってしまった花は、これでもかと眉根を寄せながら、腕を組み月見堂までの道を歩いていった。

結局、外出しても考え込んでしまっただけではいるが、家の中で悩むよりは幾らかましだ、と半ば開き直って答えのない問題を頭の中で展開する。

「花ちゃん」

店の前に辿り着いて、顔をあげた瞬間、想定外の場所から声があがって、花は小さく悲鳴をあげた。

月見堂はシャッターが閉められており、まだ来るのが早かったか、と思っていたのだが、どうやら花とほぼ同じタイミングで佳月が店へと到着していたらしい。

花のすぐ後ろから佳月の声がして驚いたが、次には振り返れば馴染みの顔がそこにはあったので、花は安堵の息を吐いた。

「橘さん、おはようございます」

ああびつくりした、と呟きながら花があいさつをすれば、佳月はいつこりと微笑んでおはよう、と応える。

今開けるから待っていて、という佳月の言葉に、花は無言で頷け

ば店の前から一步退いた。

少し錆びた鍵穴に佳月がキーホルダーにもついていない簡素なそれを差し込むと、まわし辛いのか、シャッターが、がたがた、と揺れる音がする。しかし特段の苦勞を見せるわけでもなくあっさりと鍵は開き、佳月の手で月見堂は開店した。

花はぐるりと店内を見渡し、今日は埃を取るだけで大丈夫だろうと考えれば店の奥にあるはたきを取ろうと歩を進める。

しかし道半ばで呼び止められ、花は踏み出した右足をぴたり、と止めた。

後ろを振り返れば、佳月が無でもなければ笑ってもない表情でこちらをみつめている。表現しようとするならば、惑という文字が正しいのではないか、と花は佳月を見て思った。

「昨日、楽しかった？」

佳月の言葉に、花はどきり、とすれば一瞬頬に熱が集まる感覚がある。なんとか表情を出さないようにと動揺はそれほど表に出さなかったが、佳月はその変化を見逃さなかった。

いつもは泰然としているその雰囲気さがらりと変えれば、眼光鋭く花を見やる。

花は急に一変した佳月に首を傾げれば、橘さん？と少し不安気な声をあげる。佳月はそれが気に入らないのか、瞳の強さはそのままに、花との距離を縮めればするり、と彼女の頬に手を滑らせた。

そんな行為を許した覚えもなければ、何故今そうされているのかもわからない。狼狽しながら花は彼の手を振り払おうと体を動かし、次には佳月が花をその両腕に包み込み、すっぽりと抱き込んでしまう。

ますます狼狽する花をよそに、佳月は耳元に口を寄せれば囁くように話し出した。

「ひょっとして、告白でもされた？」
「！ど、どうして」

言い当てられてしまった事に肩を強張らせながら花が返答すれば、佳月はやっぱり、とため息混じりに呟いた。

「で？なんて答えたの？」
「なんてって」

花の声に苛立ったかのように腕の中から彼女を解放すれば、しかし次には花の両肩に手を置いて、佳月は覗き込むように花の瞳を真っ直ぐにみつめる。

「付き合っの？高田君が好き？」
「……橘さん、けっこう他人の色恋話がお好きなんですか？」
「花ちゃん、答えてくれないの？」

有無を言わせぬその迫力に、冗談ばく口にした花の発言が宙に浮いてどこか気まずい。花は視線をうろつろと上下左右にさまよわせながら、やがて佳月に焦点を合わせればふるり、と首を振った。

「私は、高田君を好きだと現時点で思えないので、お断りしました」
「……そ、うなんだ」

どこか嬉しそうに顔を綻ばせる佳月に首を傾げながらも、いつそ相談にでも乗ってもらおうか、と花は続きを口にする。

「でも、どうしたらいいのか、正直よくわからない」
「……どういこと？」

低くなつた佳月の声音に、しかし花は気付くことなく、そのまま発言を続けた。

「高田君はどうしてなのか、私みたいなどこにでもいる人間に好きだつて言つてくれました。更に現時点で付き合っている男性も、想いを寄せる相手もいないんだつたら、あきらめない時まで。……私、わからないんですよ。期待を持たせるような行為は嫌なので、たとえばお試しでデートをする、とか、そういった事はしない方がいいと思うんです。でも、高田君はそれじゃ納得しないのになつて」

「……じゃあ、この先はわからないってことだね」

「それは、そう、なのかもしれません。男性として今まで意識した事なかったけど、彼も普通に男の人なんだなつて昨日は思ったわけだし、まるつきり対象外ではないと思えば可能性はゼロだなんて言い切れないですし。……まあ高田君にはほぼそれに近い事は言つたんですけどね。嘘でも、可能性はないつて言つた方が現時点ではいちばん残酷じゃないんだろうなつて思えて」

花の思い悩む様子を間近でながめつつ、佳月はみるみるうちにその顔から表情をなくせば、無言で花の顎をつかむ。

それにぎよつとして目を見開いた時には、もう花は佳月によってその唇を塞がれていた。

触れるようなものであつても、唇と唇が重なつたのは間違いない。花は仰天して固まれば、問うような、責めるような瞳で佳月をみつめる。その視線を受けて、佳月はどこか苦しそくに眉を寄せた。

「……なんですか。女の子は、かわいいんだけど、昼間は邪魔だなつて思つて、でも夜になると寂しくて、それだけだったはずなのに」

「……………」

身も蓋もないその言い様に、花はみるみる不機嫌顔になつていく

が、佳月は自身の混乱する胸中をなんとか整理しようと視線をさまよわせている。花は怒りで店を飛び出す事もできたが、彼のくだす結論が気になればなんとか思いとどまっていた。

「でも、やだつて思った。花ちゃんに、恋人が出来るってわかったら、すごく嫌」

「……橘さん？」

「俺は」

つつ、と冷たい汗が背中を一筋流れ、花はなんとなく覚えた嫌な予感に一步退いた。

佳月は、まるでなにかがとり憑いたかのようにぼんやりとした目のままにぼつり、ぼつり、と発言する。そうしていったん言葉を切れば、今度は確かな瞳で花を真っ直ぐと見据えた。

花は不覚にも、その表情に心臓が跳ねたのがわかる。

「好きなのかな、花ちゃんのこと」

「……は」

「いや、きつとそうなんだよ」

「いやあの、橘さん」

「花ちゃん、俺は君の事が好きです」

につこりと微笑んで言われた愛の告白に、花は何故だが泣きたくなかった。

第九話「出来れば留めてしまいたかった」

目の前の男を、まるで異星人であるかのように、花は呆然とみつめていた。そのうち穴が開いてしまうのではないかという程には硬直した状態を持続させる彼女を、呼び戻したのはその原因である異星人、もとい佳月である。

「花ちゃん？」

鼻先が触れ合ってしまいそうな至近距離で名を呼ばれ、悪い事にそこで素直に意識を覚醒してしまった花は、目の前の状況に混乱の極致へと導かれてしまった。

声にならない悲鳴を上げ、慌てて佳月から離れようとするが、覚束ない足取りで一步を踏み出してしまった為、あらぬ方向へ身体が傾いてしまう。

地面に身体を打ちつけてしまう衝撃を覚悟して瞬間的に花は強く目をつぶる。きしり、と音が耳に届きそうだと錯覚する程かたく閉じた瞼を、花はすぐさま見開いた。想定していた痛みが起こるどころか、何かが柔らかく彼女を包み込んだからだ。

瞳は一目見て驚愕の色を濃くした顔だとわかるほど大きくなり、しかしその他の部分はなんら反応していないかのように静かで、佳月は抱える彼女のその不安定さに噴出しそうになる。

眉も、唇も、特に何事も意識していない状態のままに保たれており、まさしく無表情といった風情なのに、その瞳だけが大きく見開かれているのだ。混乱しているのは彼女だけだというのもあってか、原因である彼はますますおかしさがこみあげた。

強張った花の身体をほぐすように背中を撫でてやれば、まるで金縛りに遭っていたかのような彼女の右手指がぴくり、と反応を示した。佳月は段々と緩められる力に穏やかに微笑む。そうして気付け

ば真っ赤になった花の顔を確認すれば、何を思ったのか佳月は背中に回していた右手を彼女の頬へと移動させた。彼の左手はいまだしつかりと花の背中に置かれている。

「あ、の」

「ん？」

だいぶ勇気を持ってあげた声はずいぶんと擦れていて、花はこれまで以上の羞恥心を覚えたが、佳月のなんでもないような微笑に幾分か波打つ心を落ち着かせることができた。

ひとつ深呼吸をしたあと、今度は決意した表情で彼女を抱きしめている男と向き合う。

「とりあえず離してくれませんか」

花の言葉に、佳月はあっさりと抱きしめていた腕を下ろし、頬に触れていた手も引っ込める。

「……あの、橘さん」

「今まで触ってた所からは離れたでしょ？」

「そういう問題ではなくて」

「逃げられたら、嫌なもの」

にこにこ人好きする微笑を浮かべながらのたまった彼の右手は、花の左手をしつかりと握り締めている。花は自身が追い込まれた草食動物のように思えてならなかった。そうなれば、佳月は当然ながら肉食動物であり、結末はひとつしかありえない。

何故か変な方向へと導いてしまった思考回路をなんとか断ち切ろうと首を横に振れば、佳月が目の前の花に首を傾げる。

頭に疑問符を浮かべるその顔に、花はあんたのせいだろうが、と

噛みつきたい思いだ。

放っておけばめまいを起こしてしまいそんな心境をなんとか建て直し、花はなるべく佳月の距離を意識しないように努める。

「とりあえず、先程の話を整理したいんですが。何かの間違いでなければ、橘さんは、私に、その、好意を抱いていると取って良いんですか？」

「なんでそんなまわりくどい言い方をするの」

何故そこでそう返答するのだ、と花は頭の左半分がずきん、と痛みだした。そのうちきちんとした、という言い方はおかしいが、頭痛になりそうだ。そうなる前になんとか痛みの元を断ち切ってしまいたい。

そう、彼女にとって、今日の前に広がっている現実、なんら歓迎できるものでもなく、ただただ彼女を苛んでいるだけなのだ。

こんなとき、花は自身の真面目さを目の当たりにして落ち込んでしまう。もっと物事を軽く捉えることが出来たならば、新しい世界が彼女を待っていることだろう。

しかし、花には出来ない。

普段は表面を撫ぜるように考え、都合が悪ければうつちやるのは彼女のあまり良くない癖だ。すべてにおいて四角四面なわけではなく、ある程度の柔軟性を山田花は持っている。けれども、ひとたび深刻だと思ってしまうと、とことんまで悩んでしまうのもまた、彼女だ。これが花のお人よしと評される部分であり、また、不器用な所謂人より損をしてしまうような部分であった。

花は、こんな自分がそう嫌いでもない。すべてにおいて傍観を決め込む事無かれ主義よりは、幾分でも熱くなれる場所があるのは悪い事ではないと思う。しかし、しかしだ。

こんな風に、当事者になった彼女は、心底思うのだ。深く考えない人間になりたい、と。今回の場合、深く考えない人間であれば最

悪を想定して同時進行のお付き合いも考えられなくも無いが。そんな種類の人間を、花は尊敬も軽蔑もしてはいないが、やはり自分にはそんな真似ができるはずもなく、結果、悶々と頭を悩ませなければならぬ事実は今から辟易している。

好意をもらうことが嬉しくないわけではない。しかし、そう単純なことではないのだ。

花は現在、特別に想う人間が存在しない。そうすると、話はずいぶんややこしくなる。

現時点では、高田も、目の前に居る佳月も、横並びの状態だということだ。つまりはどちらにも可能性があり、どちらにも玉砕がある。そうなつてくるとふたりの行動しだいになってしまっただけで、花にとって事態はどんどん悪化の一途をたどってしまう。

そんなどこぞの物語のような面倒くさい場所に、花は身を置きたくはない。というか身に余る。花は特別不細工でもなければ、特別可愛くもなく、特別出来た人間でもなければ、特別悪い人間でもない。どこにでもいる、女子大生だ。

それなりに青春を謳歌していそうな、それなりに毎日を過ごしていそうな。恋人が欲しくないわけではないし、作らない主義というわけでもないが、こういった繊細な問題には正直な本音をいえば巻き込まれたくはなかった。

自惚れではなければ、高田はそう簡単に引きそうにはない。では、目の前の佳月はどうかだろうか。

もうすでに花を想う人間がいるとわかってる状態で、彼は花が好きだと告げた。それがどういった種類の好意なのかは今から確認しなくてはならないが、花の考える最悪が当たってしまった場合、どうなるのか。

正直、目の前の男はつかみどころがないぶん、後輩である高田よりも恐ろしい。あくまでも花視点ではあるが、佳月の女性事情を思えば、ますますもって裸足で逃げ出したくなる現実が待っている。

花は肩を少し揺らして、欲しい答えをくれない男へ、再度催促の

言葉を用いた。

「橘さん、あなた私の事が好きなんですか？」

「好きだよ」

さつきそう言ったじゃないか、と目を丸くする佳月の横つ面を思い切り張りどばしたい衝動に駆られたが、そこはなんとか堪えた。

「……それは、あれですか。人として好きとか、友人として好きとか」

「なんでそんなことをあんな改まって言うの？花ちゃんをずっと隣に置いておきたいから俺は君が好きだって言ったんだよ」

「別に友だち同士だってずっといっしょにいようね、みたいな事言うじゃないですか」

花の言葉に一瞬考える仕草を見せた佳月は、ふむ、とひとつづなずく。花はみつともないと思いつつも、彼が高らかに友人宣言をしてはくれないか、と願ってしまう。

そんな彼の次なる言葉は、やはり彼らしいといえばそうだった。

「花ちゃんは、友だちって関係でもキスとかそれ以上をさせてくれるの？」

「！へ」

「俺以外とはそういう行為をしないって約束してくれるの？」

「いや、あの」

「夜とか、出来るかぎりいっしょにいてくれるの？」

たたみかけるような佳月の言葉を遮るように、花はおおげさにがくり、と頂垂れれば、力なく呟いた。

「それはもはや友だちとは言いません……………」

花の言葉に何が楽しいのか弾んだ声でそうでしょう、と佳月が答える。花は下を向いたことで視界に入った自身の左手をながめて、ため息を吐く。

「無理です、嫌です」

花の物言いが気に入らなかったのだろう。む、と眉を顰めた佳月は、握っていた手に力を込め、花の左手をより強く包んだ。

「高田君には保留みたいなお返事をしたんでしょう？」

「きっぱり断りましたよ」

「でもまんざらでもないみたいなことさっき言ってたじゃない」

「それはまあ、そうですね」

「高田君は脈ありで俺は完全になしってこと？なぜ？」

じりじりとまたも距離を縮めてくる佳月に、花は後退する。しかしどんなに離れようとしても、佳月が花の左手を握っているため一定の距離しか稼げない。花は焦りと共に、佳月を落ち着かせようと声を上げる。

「いえ、べつに！高田君だって脈ありというわけでは」

「でも可能性はゼロじゃないんだよね？」

「絶対とは言えない、とは確かに先程発言しましたが」

「じゃあ俺にも可能性あるよね？あきらめなくなっただっていいんだよね？」

「橘さんは複数の女性と関係してるでしょう！少なくともそんな男性は嫌ですっ！」

追いつめられていたとはいえ、あまりこの問題を取り沙汰したくなかった花にとって、それは禁句であった。

佳月が言ったことにより傷つくかどうかはわからないし、事實は事實なのでその点を反省するつもりはあまりない。とにかく佳月が女性にだらしないらしいという問題について、花は出来ればずっと無視を決め込みたかったのだ。何かの拍子に、そんな面を発揮されたら困るのは花なのだから。

そろり、と彼の表情を花がうかがってみれば、佳月は怒るでも嘆くでもなく、ただただ彼女をみつめている。その顔は、無垢な子どものような純粹さがどこかあり、花はなんとなく直視をためらった。いつまでも黙りこくっている佳月にたまりかねたのか、花は遠慮がちに声をかける。呼びかけた彼女の声に反応して、佳月がやっとああ、と声をあげた。

そこでやっと、佳月はわかりやすく表情を露にする。困ったように微笑む彼を視界に映した花は、その意味を考えてみる。

やはり彼のような男は、ひとりに絞り込むことが嫌なのだろうか。ならば今、困った顔で花をみつめるのもわかる。きっと彼はいま花と数多い女性とを天秤にかけて、どちらに傾くべきかで迷っている。そう結論をくだしたところで、ずいぶんと素直な性格だな、と呆れるわけでもなく感心してしまう。

いくらでも誤魔化してしまえばいいのに、変なところで佳月は純粹だ。

しかし、すっかりと彼の心を性格に読み取ったと思い込んだ花は、またも予想外な彼の言葉に驚かされた。

「ごめんね。そんなこと言われると思わなかった」

「……はい？」

「だって、花ちゃんがいれば彼女たちを相手にする必要がないし」

「はい!？」

花のすつとんきような声に、佳月はううん、と首を傾げる。

「伝わってるものばかり思ってたけれど……そうじゃなかったんだね。ええと、俺はね、別にたくさん女の子と関係を持ちたいわけではないんだよ」

「え、でもだつて……」

「別にそういった行為が特別好きってわけでもない」

「ええ？」

佳月の言葉を聞けばきくほど混乱していく花を眺めつつ、佳月は実にマイペースに伝えたいことを紡いでいく。

「俺はね、眠れない夜があるんだ。そんなときはひとりで居たくない。だから、隣に誰かがいてくれるだけでいいんだ。別に男だつてかまわない」

「……………」

「でも、ベッドを共にすると、どうしたつてむこうはそういうのを期待するでしょ。俺は望まれればそういうことをするけど、俺自身がしたいのかつて言ったら、どちらでもかまわない。……いや、どちらかといえば、したくない、のかもしれない」

固まる花を他所に、とんでもないことのようなそうでもないようなことをつらつらと花に話しながら、佳月は肩を竦めた。

「さっき男でもいいつて言っただけで、そうそう親切な友人なんてつかまらないし、男性相手にする才能はないから、必然的に女性を誘うしかなくなるでしょう。で、結果的になんだか乱れた生活をしているように見えてしまうけれど」

「いや、あなたの真実と相手の真実に齟齬があつたとしても、事実そうでしょ、乱れてるでしょ、ようにじゃないでしょ」

「言葉尻をとってつつくのはよくないな。花ちゃんにいじめられたら、俺泣いちゃうよ」

「そんな繊細さがあなたにありましたか」

思わずつつこんでしまい、更に言葉を重ねたところで、花はいや、と自身の言を否定する。

繊細、なのだ。

橘佳月という男は、事実、非常に繊細なのだろう。

だからこそ眠れぬ夜があり、だからこそ女性たちに偽名を使う。そうまでして、暴かれたくない何かがあり、また、苦しめられる何かがあるのだ。

花は、もう隠すこともなく素直に呻き声をあげた。
なんて、ああなんて。

「……橘さん、超めんどくさい」

所謂わけありな人間、なのだろう。わかつてはいたが、本当になんとなくしかわかっていなかった。

今の言葉が、単に花をたらしこむ方便などとは、どうしても思えない。口説く為の言い訳ならば、別にこんな作り話をつらつらと並べ立てる必要はない。

適当な愛の言葉を囁き、適当な約束をすれば良いだけの話だ。もう君だけにするよ、と。……言われたところで胡散臭いことこの上ないが。

もしも今までの言葉がすべて偽りであるならば、策士を通り越してただの阿呆だと花は思ってしまう。関心をひくどころか完全にひいてしまう。母性本能をくすぐられるような女性も中にはいるのかもしれないが、正直、稀だろう。

まあ、簡単に言ってしまうえば、花は佳月の言葉をそれなりに信じることは出来た。ゆえに、口をついたのが先程の台詞だ。あまりに

も自然に出してしまった為、言ってしまったあとのことを考えていなかった。

慌てて口を押さえてももう遅い。さすがに失言であったと佳月をみれば、彼はもうだめだといわんばかりに嘔出した。

盛大に声をあげて笑う彼を見て、花はまたしも驚きに固まった。今はもう離された手にも気付くことなく、あんぐりと口を開けている。間抜けといえなくもない。

「あっはははは！花ちゃんてやっぱり良いねえ。そうそう、俺はとっても面倒な男だよ。わかっていなかった？」

「……はあ、なんとなくは」

「じゃあ予想以上だったかー、あーおかしい」

目の前で笑う男に、何がおかしいのか、と胡乱な表情を向けてしまうのは、現状致し方ないことではなからうか、と花は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154t/>

路地裏のお月様

2011年10月9日09時48分発行